

日本古代史ネットワーク 古代史を解明する会

第32回 「古代朝鮮と日本の歴史」

日時:2023年8月12日(土) オンライン開催

丸地三郎

はじめに

- 日本の歴史教科書では、キビ・アワなどの雑穀栽培・水田稲作・弥生土器・青銅器・鉄器は、朝鮮半島から日本へ渡ったとする。
 - 天皇家の祖先を韓国に求める説もある。
 - 本当にすべての流れは朝鮮半島から日本へ向かっていたのだろうか、再確認してみたい。
- 水田稲作に結び付く弥生土器は、半島で沢山出土し、半島から日本へ流入したのだろうか？
 - 韓国側の弥生時代の土器の発掘量が拡大したことから、数量的な確認ができるようになり、今までの常識と異なる結果を報告する論文も出てきている。
- 先入観にとらわれずに、歴史研究の基本に戻り、再検討する。
 - まずは、韓国の歴史教科書に学び、書いてあること、書いて無いことから確認して行きたい。

-
- 4月の「長浜浩明氏の動画論評」では、韓国の国立博物館の記載など、新鮮な情報が有った。
 - 5月の「朝鮮古代史と日本」では、日本の歴史教科書に近い記述が示された。
 - 異なる情報が有り、もう一度見直して、整理して置きたい。
-

歴史研究の原則

時代の流れ → → → →

地域①

現象A

地域②

類似現象A

地域①

現象B

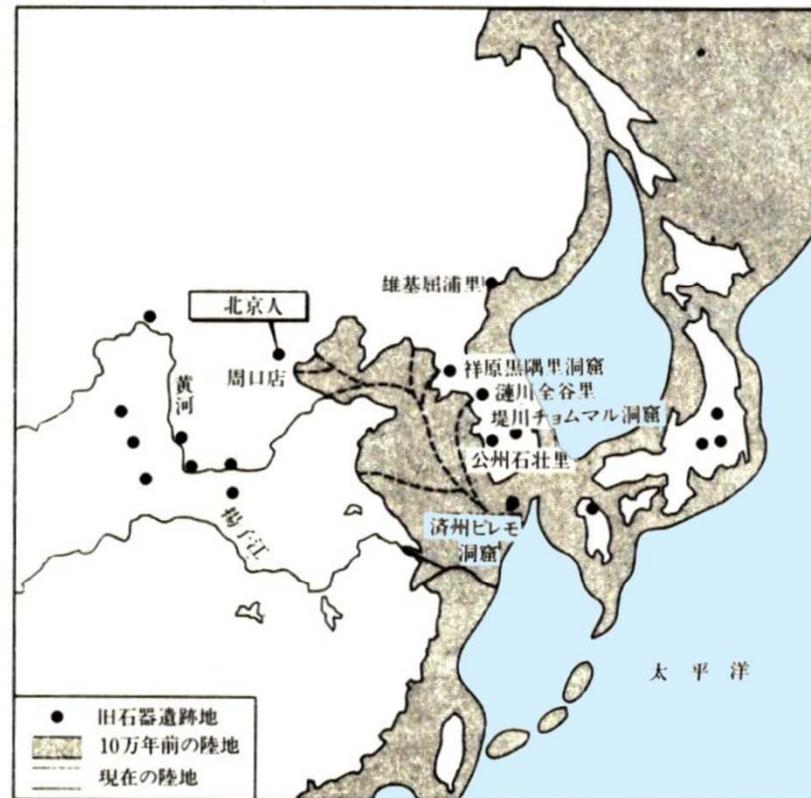
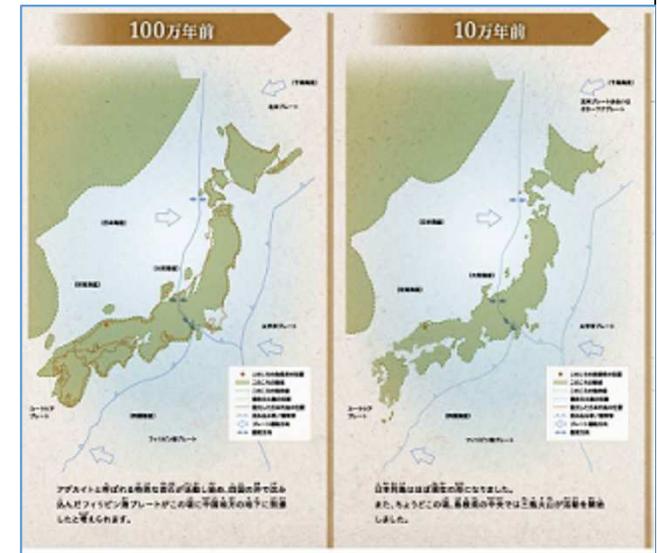
地域②

類似現象B

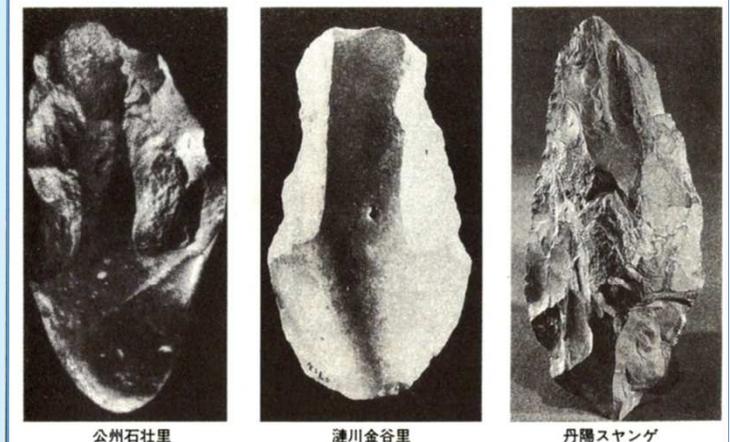
- 近接した地域で、類似した現象が発生した場合
 - 地域①で早い時代に発生した現象Aが、地域②に伝播したと見る。
 - 地域①で遅い時代に発生した現象Bが、地域②の類似現象Bに伝播したとは考えない。
- 判り切ったことだが、確認する。

まずは、韓国の歴史を教科書から学ぶ

- 2006年発行の入門韓国の歴史[新装版]—国定韓国中学校国史教科書—
 - 世界の教科書シリーズ4 明石書店発行 石渡延男監訳 三橋広夫共訳
- 韓国の中学の教科書からまず学んで行く。
- 韓国の歴史は、70万年前から原人の活躍する時代から始まる。
 - 日本にも同時代の遺跡があるように地図では掲載(旧石器事件を無視)
 - 日本が10万年前は地続きとの地図を掲載。
 - 約65万年前と約43万年前に一時的に陸橋がかかった時期があったが10万年前は現在とは地形は変わらない。
- 中国とは地続きのため、韓国に原人が存在した可能性はある。



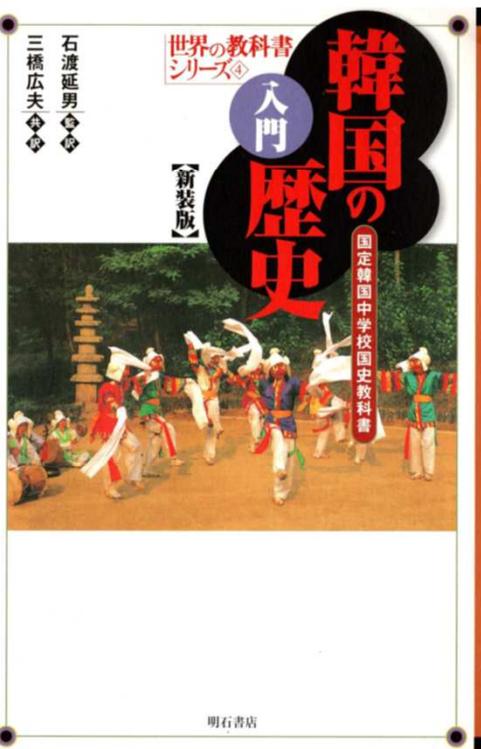
旧石器時代の東アジア



公州石壮里

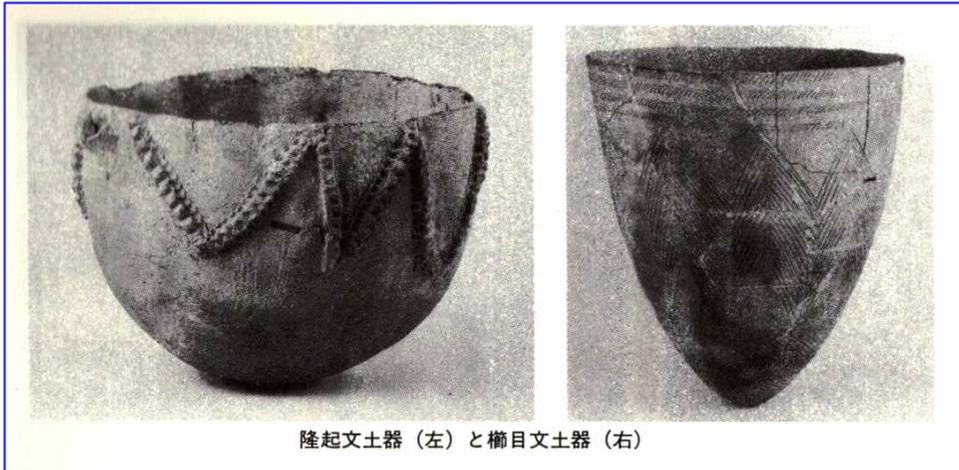
漣川金谷里

丹陽スヤンゲ



新石器時代

- 紀元前6000年前頃より磨製石器と土器を使った新石器時代がはじまった。
- 新石器時代には、いわゆる無文土器と隆起文土器を作って使用したが、後には、櫛目文土器を使うようになった。
- 竪穴住居が使われた。



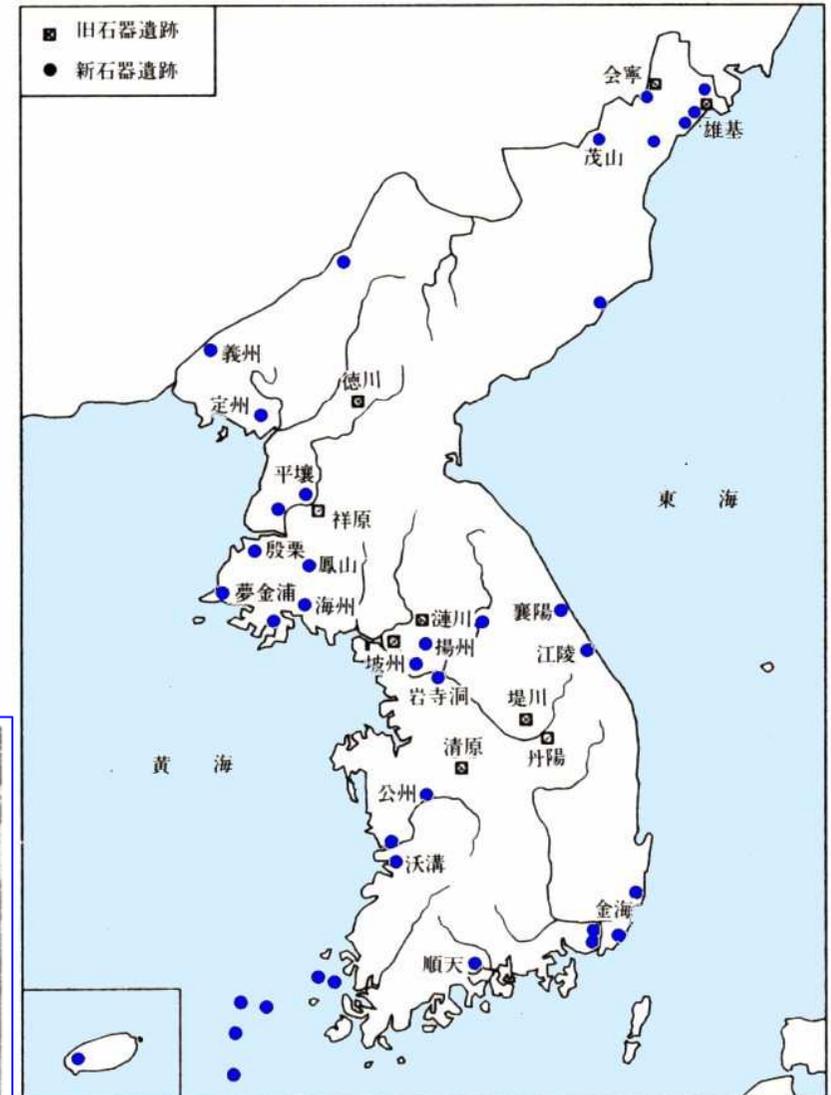
隆起文土器（左）と櫛目文土器（右）



新石器時代の磨製石器



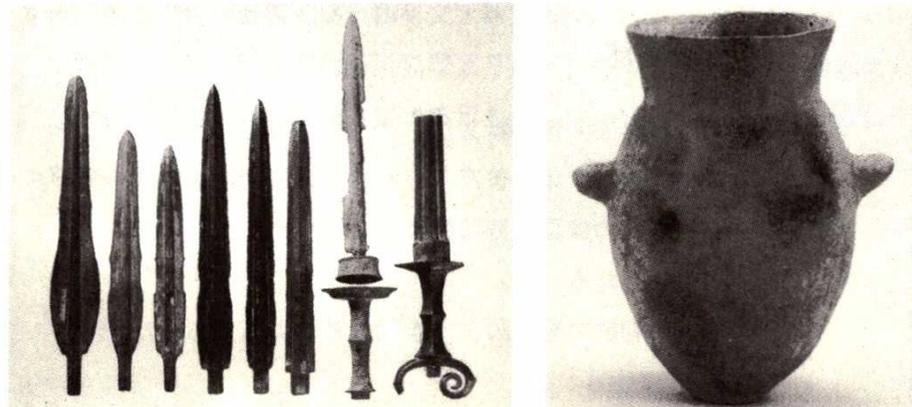
新石器時代の竪穴住居遺跡のようす（ソウル・慰文洞）



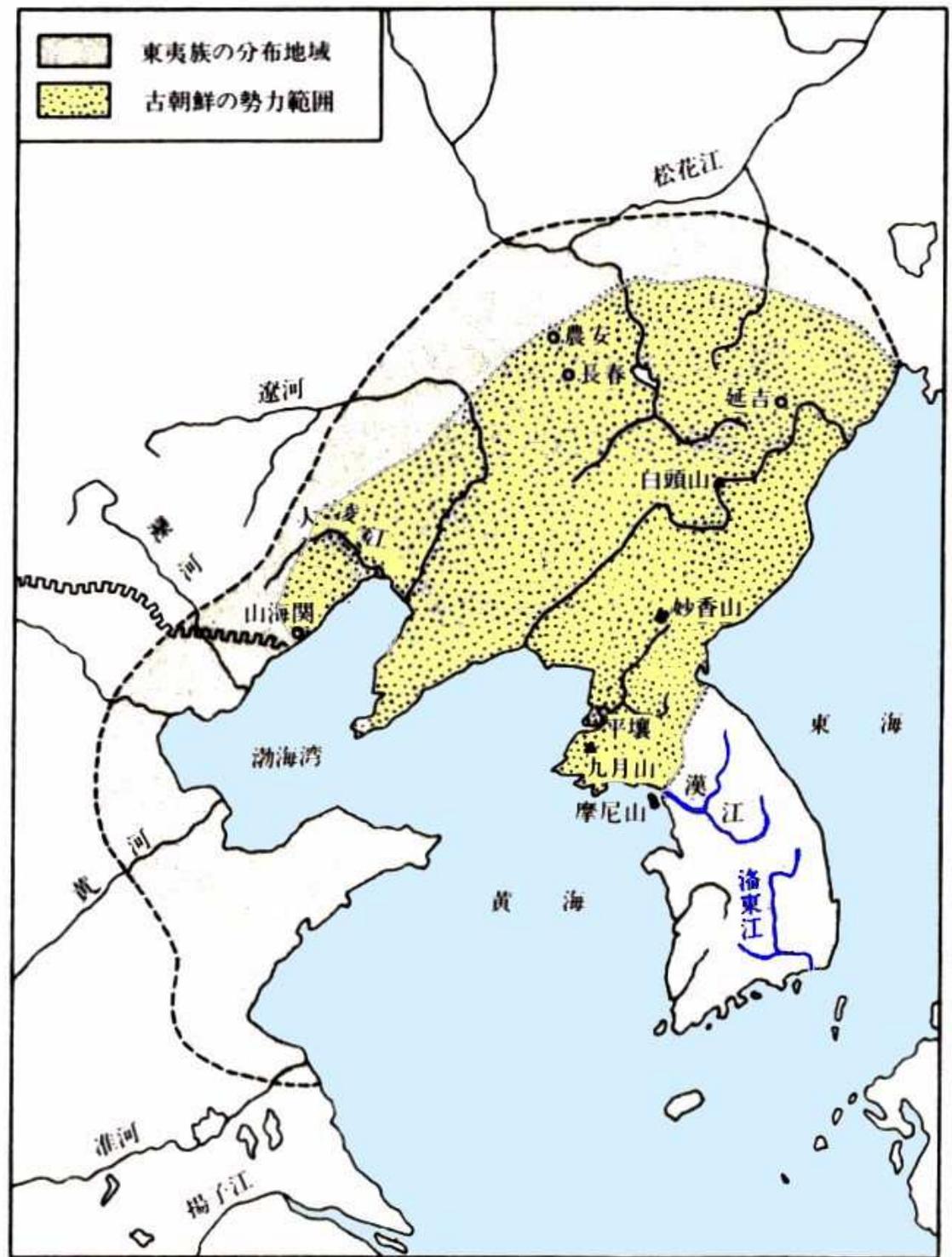
先史時代の遺跡

古朝鮮の成立と発展

- 檀君の朝鮮建国:紀元前2333年
- 紀元前4世紀頃に遼寧地方を中心に満州と韓半島北部地域を統治する連盟王国として発展した。
- 衛満が準王を追い出して古朝鮮の王となった。
- 古朝鮮は漢に対抗する勢力として大きくなったが、漢に、紀元108年滅ぼされた。
- 漢は郡県を置いた。
 - 朝鮮民族の反撃を受けて漢は退いた。
- 紀元前10世紀頃、満州では青銅器時代が始まった。青銅剣と青銅鏡があった。
- 遺物と遺跡の分布を見ると、韓半島と満州・遼寧地方の青銅器文化は同じ系統の文化で、中国の青銅器文化とは性格が異なる。
- この時代の土器は無文土器。



青銅剣（左）と無文土器（右）

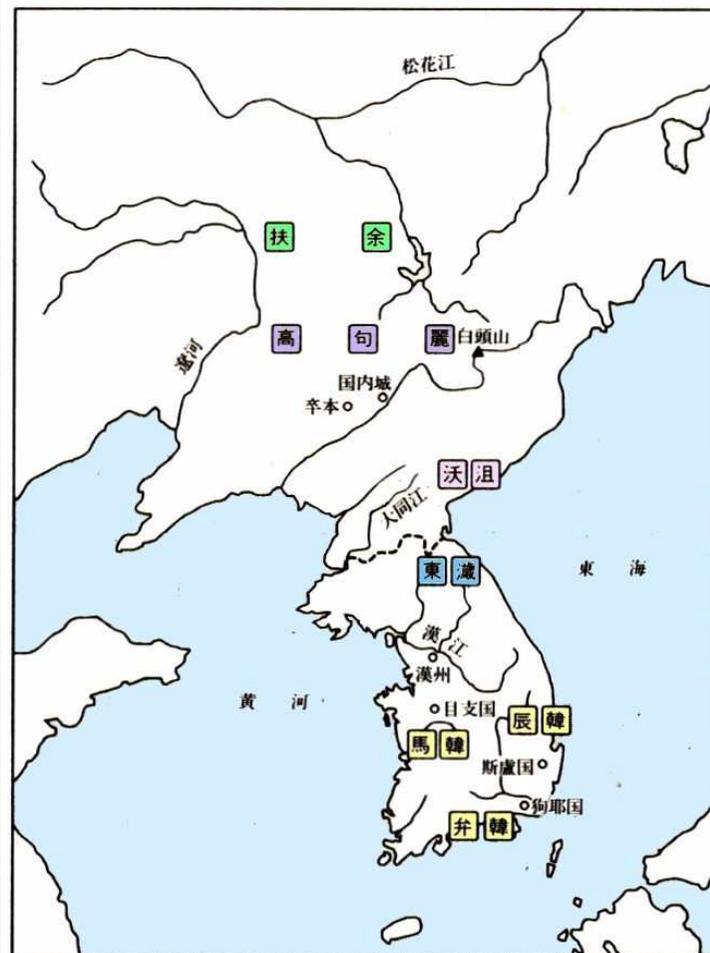


古朝鮮の勢力範囲

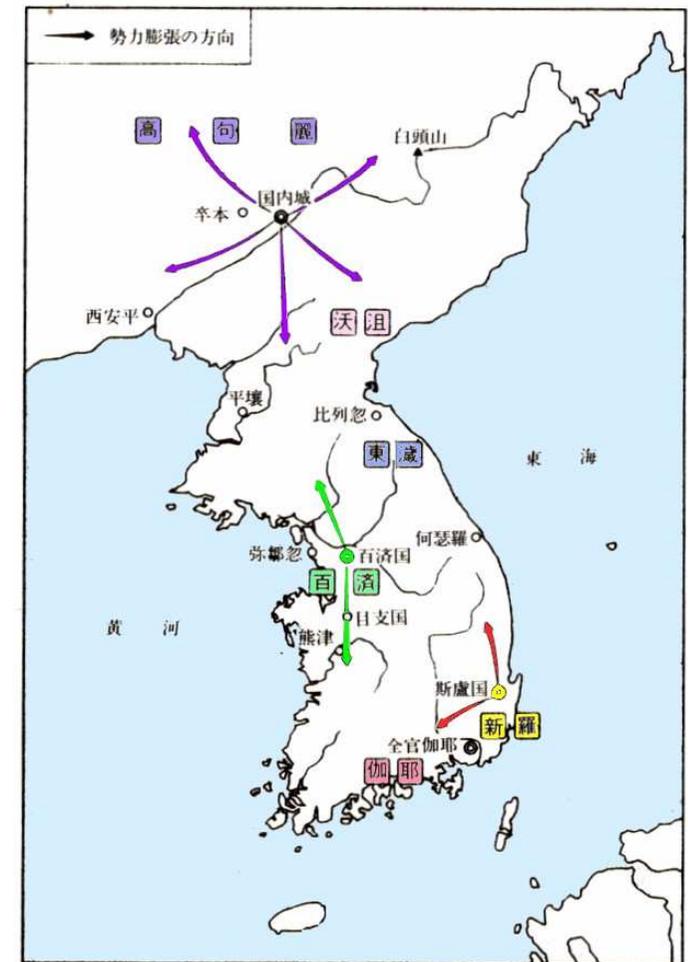
中国(漢など)が支配した時代

- 古朝鮮の衛満が108年に漢に滅ぼされ、その後、朝鮮民族の反撃に合い退いた。
 - 楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡の漢四郡として400年間支配されたが移転や廃止により最後は 楽浪郡のみが残った。
- 扶余・高句麗・沃沮・東濊・馬韓・弁韓・辰韓が生まれた。
 - その諸国の位置は下の図の通り。

- その中で、三国が成長を遂げた。右・下図の通り。
 - 高句麗が発展
 - 313年古朝鮮の故地を取り戻す。
 - 扶余の系統を引く百済が成長
 - 4世紀の近肖古王の時に飛躍的に発展。
 - 5世紀に高句麗に押され、漢江流域を奪われる
 - 辰韓の系統の新羅が成長
 - 4世紀後半、奈勿王(17代)新羅の基礎を築く。
- 沃沮・東濊は継続
- 伽耶も残る



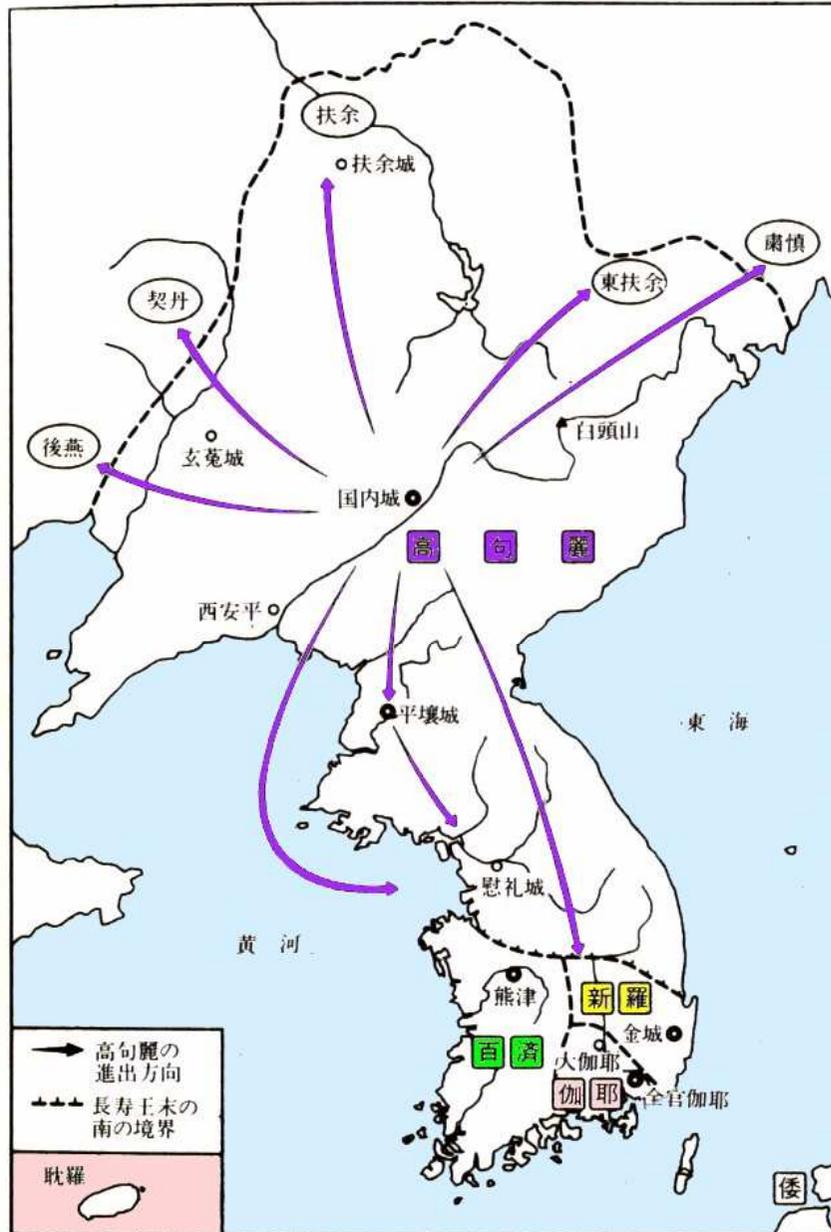
諸国の位置



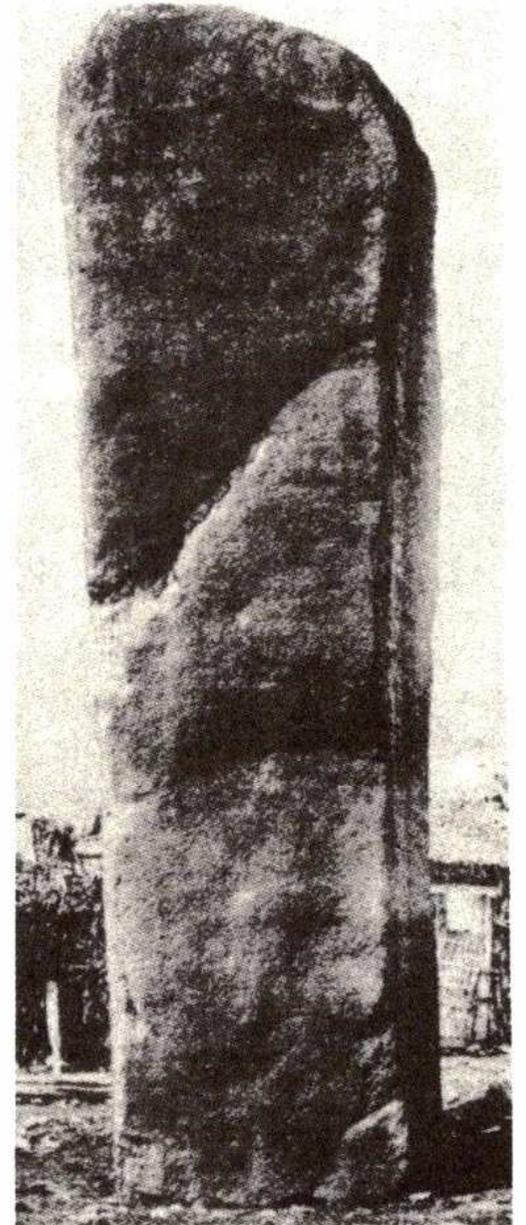
三国の勢力拡張

高句麗の膨張

- 4世紀の初め、美川王(みちよんわん)の時に中国勢力を完全に撃ち退け、古朝鮮の故地を取り戻した。(313年)
- しかし、南方の百済の侵略を受け、大きな打撃をこうむった。
- 4世紀後半、小獣林王の時に、前秦(五胡十六国時代)と外交関係を樹立。
- 5世紀、広開土王が領土を広げ、高句麗、全盛時代を開いた。



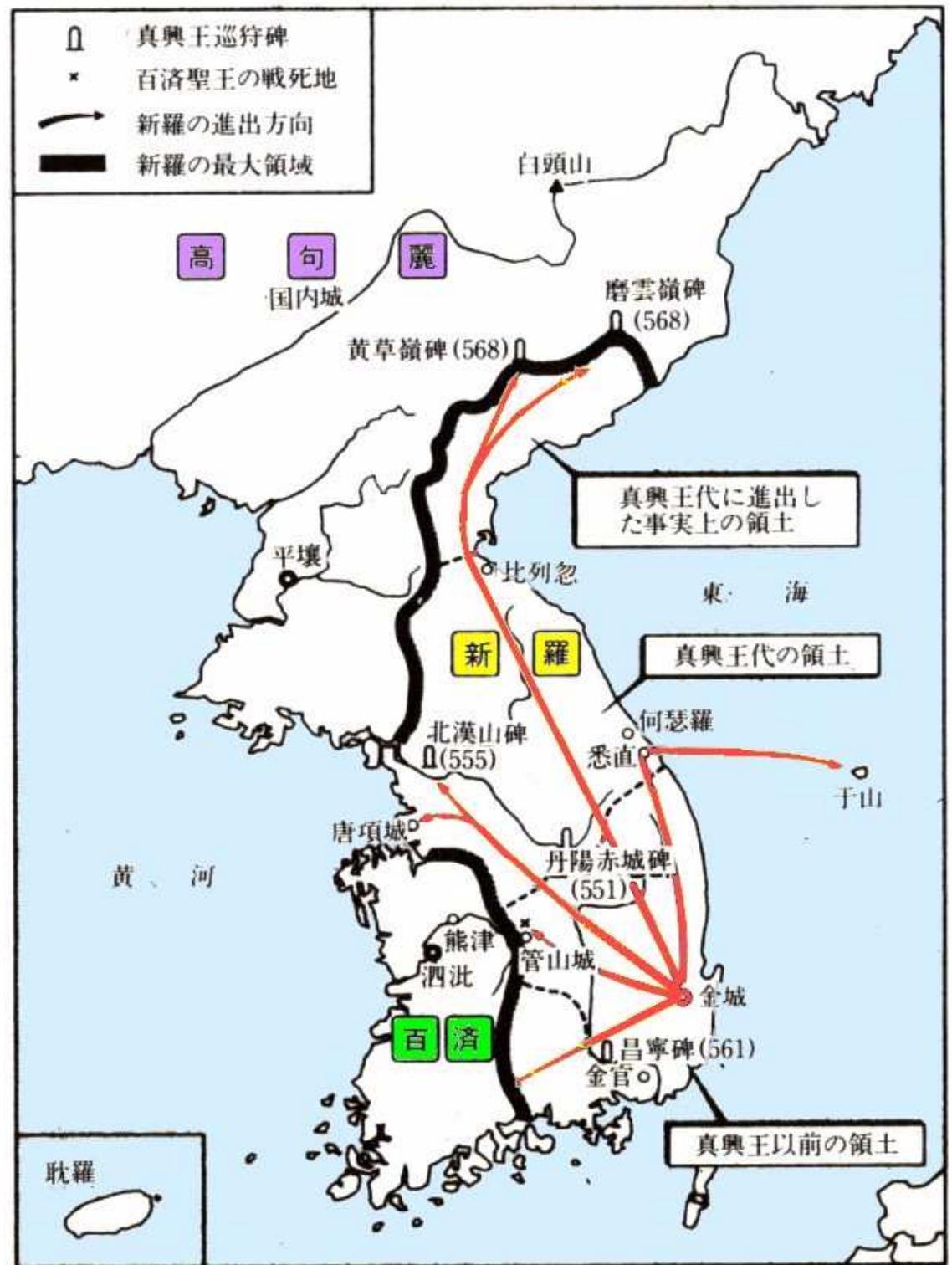
高句麗の全盛



広開土大王陵碑

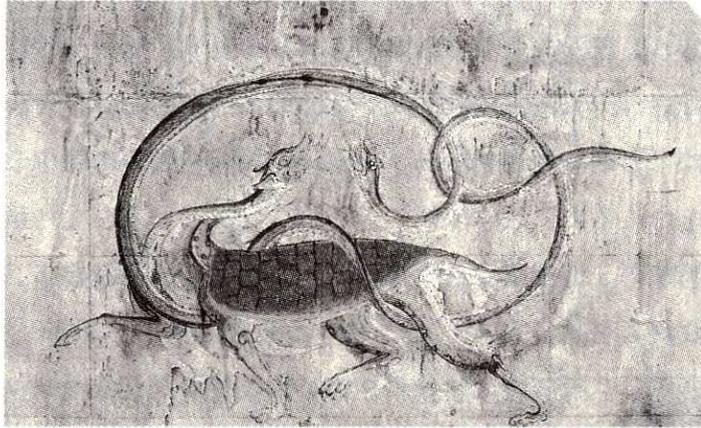
新羅の飛躍

- 4世紀後半、奈勿王(17代)新羅の基礎を築く。
- 新羅は、一時国家の発展のために高句麗にかなり助けられた。
- 訥祗王以後は百済と同盟を結び(433年)、高句麗の内政干渉と南進をけん制。
- 新羅は6世紀、法興王・真興王(540-576在位)の時に、飛躍的に発展。



新羅の発展 (6世紀)

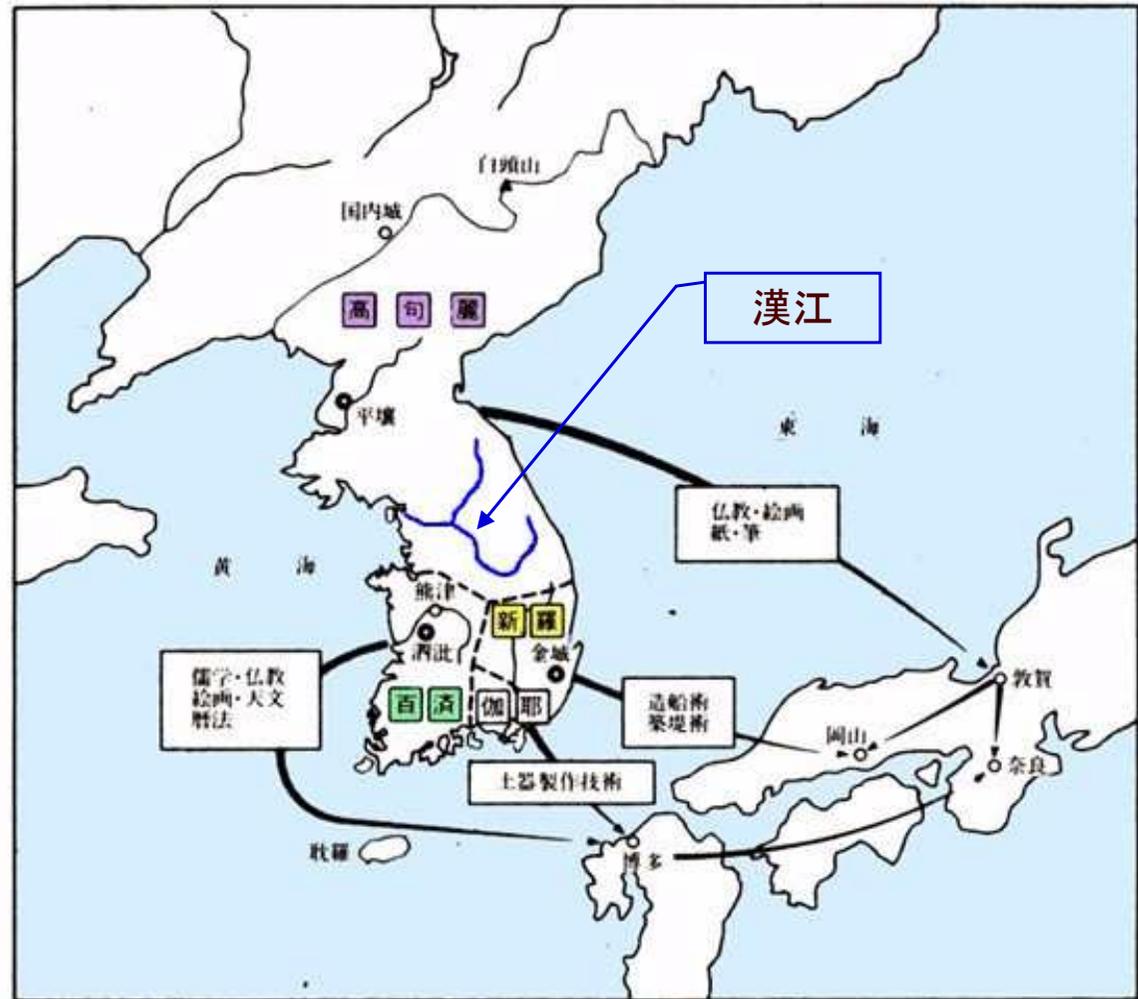
三国文化の日本伝播



江西大墓玄武図（平安・江西）



日本高松古墳壁画



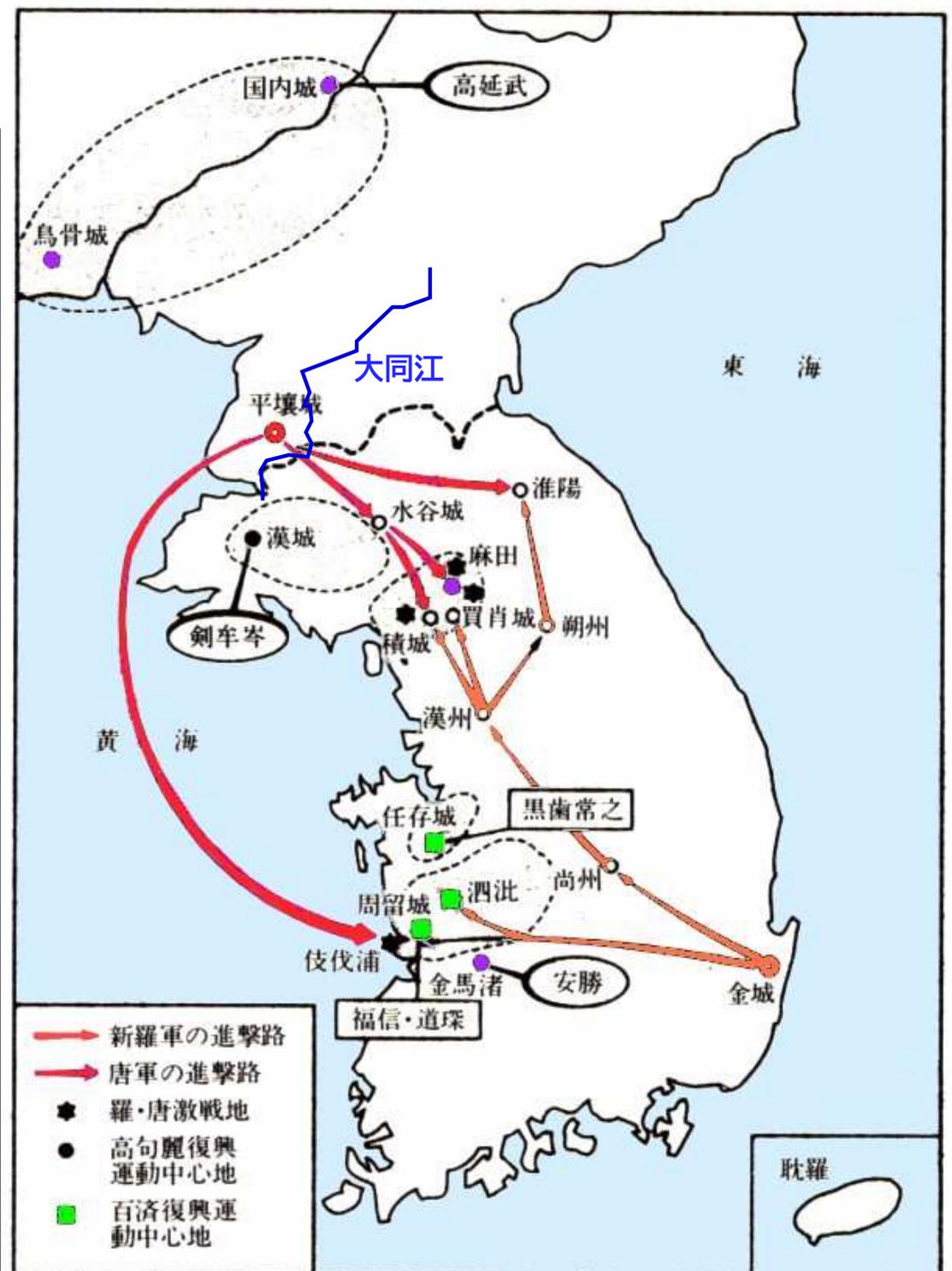
三国文化の日本伝播

新羅は船をつくる技術、ならびに堤防と城郭を築く技術を、伽耶は土器をつくる技術を日本に伝えてあげた。

このように三国は発達した文化を日本に伝えてあげ、日本の古代の飛鳥文化を生み出すうえで大きく貢献した。

百済・高句麗の滅亡

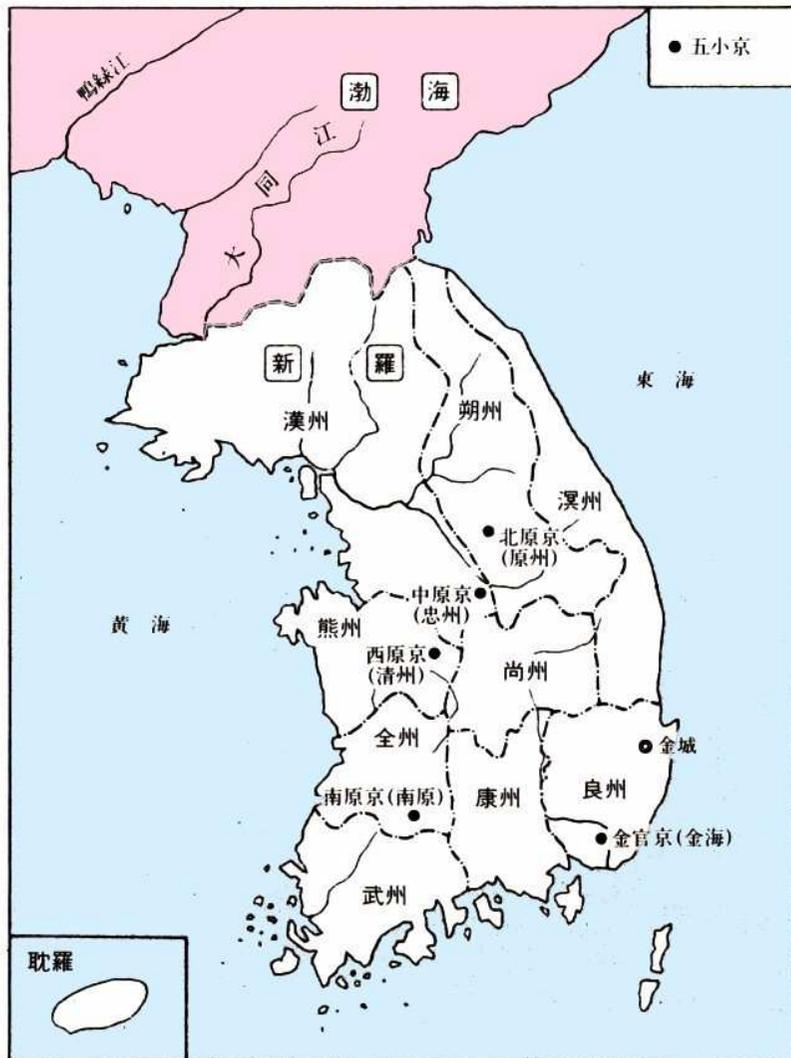
- 漢江流域をおさえた新羅は、唐と連合し、百済・高句麗を倒しついに三国を統一した。
 - 新羅が漢江流域をおさえた後、百済と新羅の関係は悪化した。
 - 高句麗と中国(唐)と戦いをつづけている間、新羅は百済をしばしば攻撃した。
 - 百済の義慈王は、新羅を攻撃。新羅から唐へ行く交通路を断ち切ろうとした。
 - 新羅は唐に応援を求めた。
 - 新羅軍は唐の軍事的支援を得て、百済を攻撃した。
 - 百済は滅亡した。(660年)
 - 滅亡後、百済復興運動は、一時、200城が呼応して大いに氣勢が上がったが、指導者層が分裂して失敗した。
 - 新羅と唐は高句麗を攻撃し、668年高句麗を滅亡させた。
 - 唐は、新羅に大同江以南を与えるという約束を破り、韓半島全体を支配しようという野心をあらわにした。
 - 高句麗の復興軍を支援し、唐軍と戦い、平壤城から追い出した。
 - 新羅が三国を統一した。
- 白村江(663)の戦いの記述はない。



百済・高句麗の復興運動と羅・唐戦争

統一新羅成立・渤海の成立と成長

- 7世紀、統一新羅が成立し、国家の収入を増やし、貴族勢力をおさえ、土地制度を改めた。
 - 海上交易、儒学導入、仏教が盛んになり、天文学・数学など科学技術を発展させた。
- 高句麗の遺民が、渤海を建国。唐をけん制しながら成長。
 - 9世紀前半に全盛期。



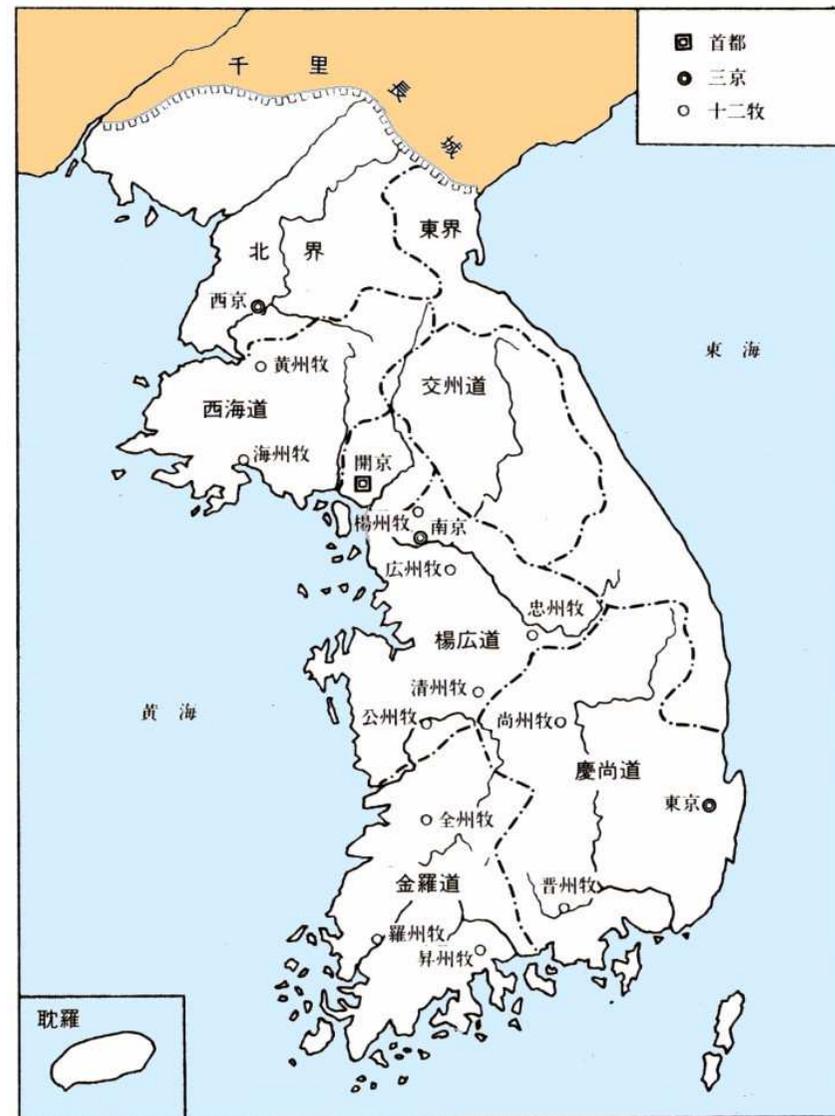
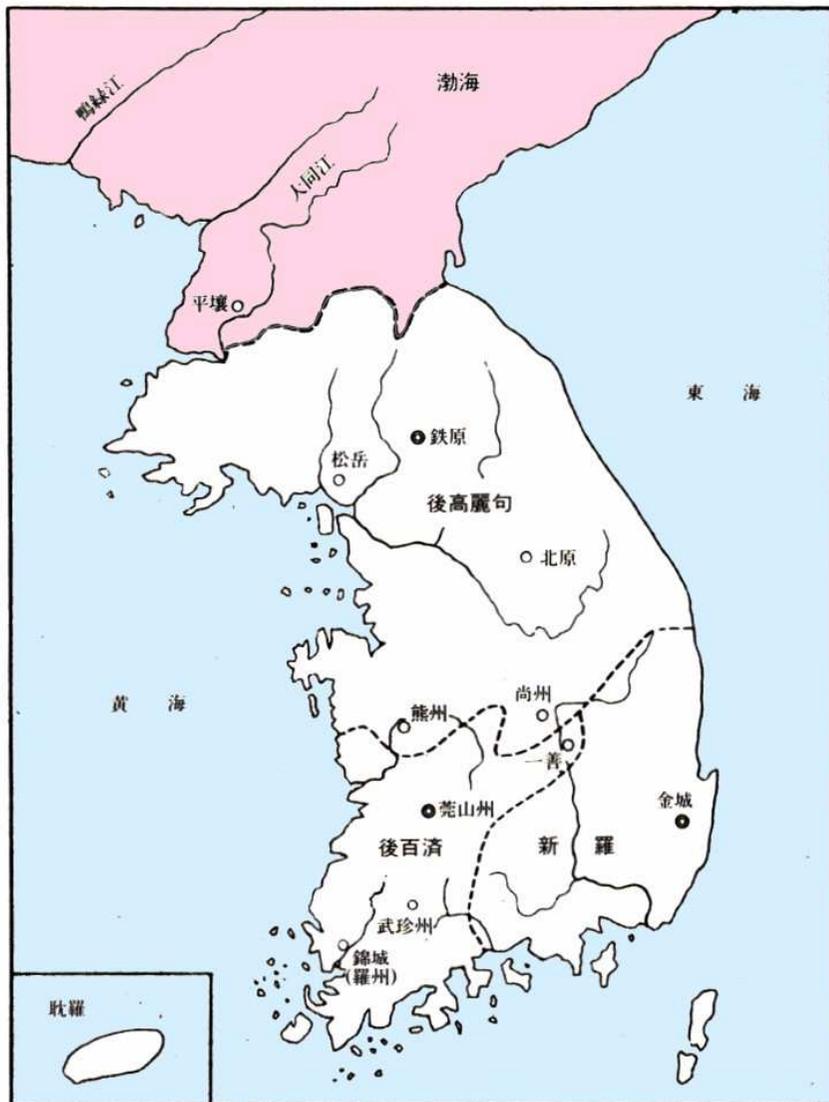
統一新羅の行政区域



渤海の領域

高麗の成立(936年～1392年)

- 9世紀:新羅末期に、貴族間に分裂が発生。
- 10世紀始めに、後高句麗/後百済が生まれ、後三国が成立した。
 - 渤海が滅亡し、新羅も滅亡
- 高句麗を継承するとして高麗が、後三国を統一した。(936年)

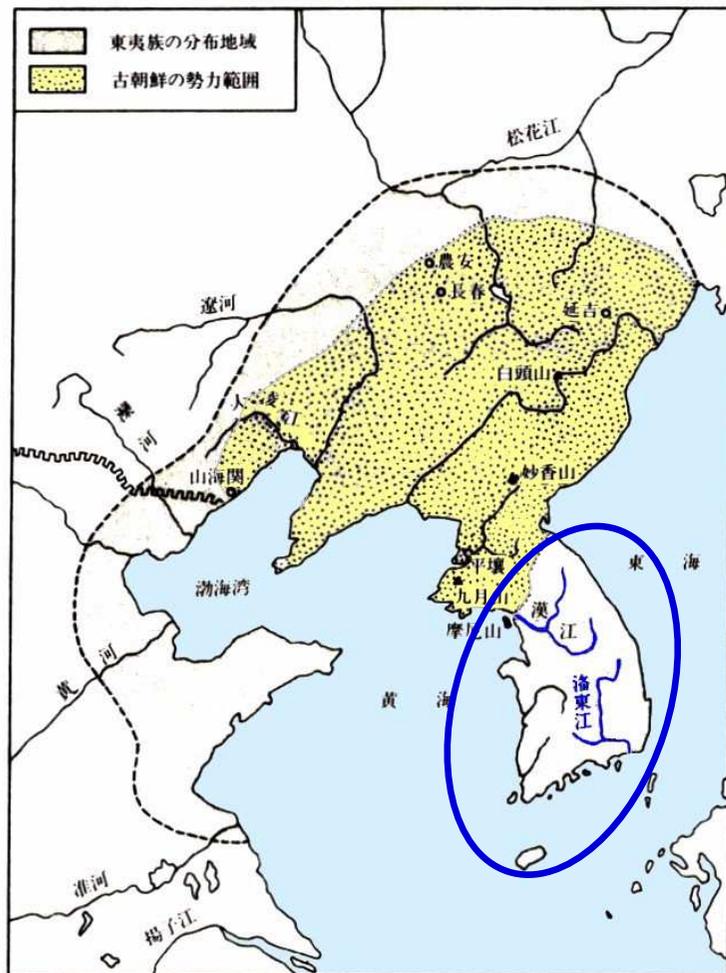


韓国の歴史教科書では、漢江以南の地域は空白地帯

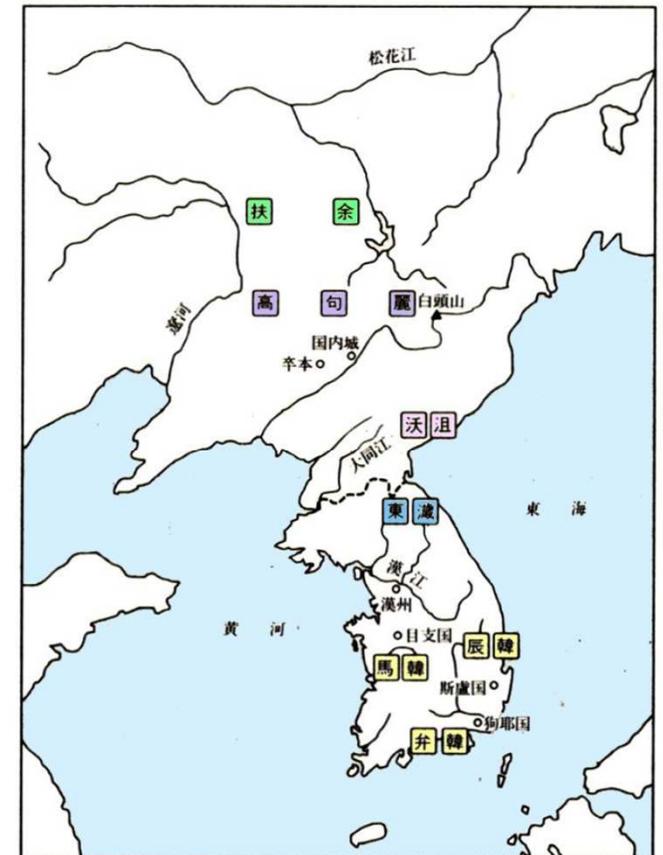
- 檀君から衛満朝鮮成立
- BC108年古朝鮮滅ぶ
古朝鮮は黄色の領域
- 漢江以南の地方の記載が無い。
空白地域 {新石器時代～BC108年}

- BC108年古朝鮮滅ぶ
漢が支配(4郡)
- 漢江以南地域へ、
古朝鮮人が逃避・避散
- BC108年～AD313年まで
漢江の南の地域の記載なし
空白地域 {新石器時代～
BC108年～313年}

- AD313年の高句麗による漢の
支配脱却は、北方からの圧力
- 百濟・新羅の発展は4世紀以降
 - 百濟4世紀に飛躍的に発展。
 - 5世紀に高句麗に押され、
漢江流域を奪われる



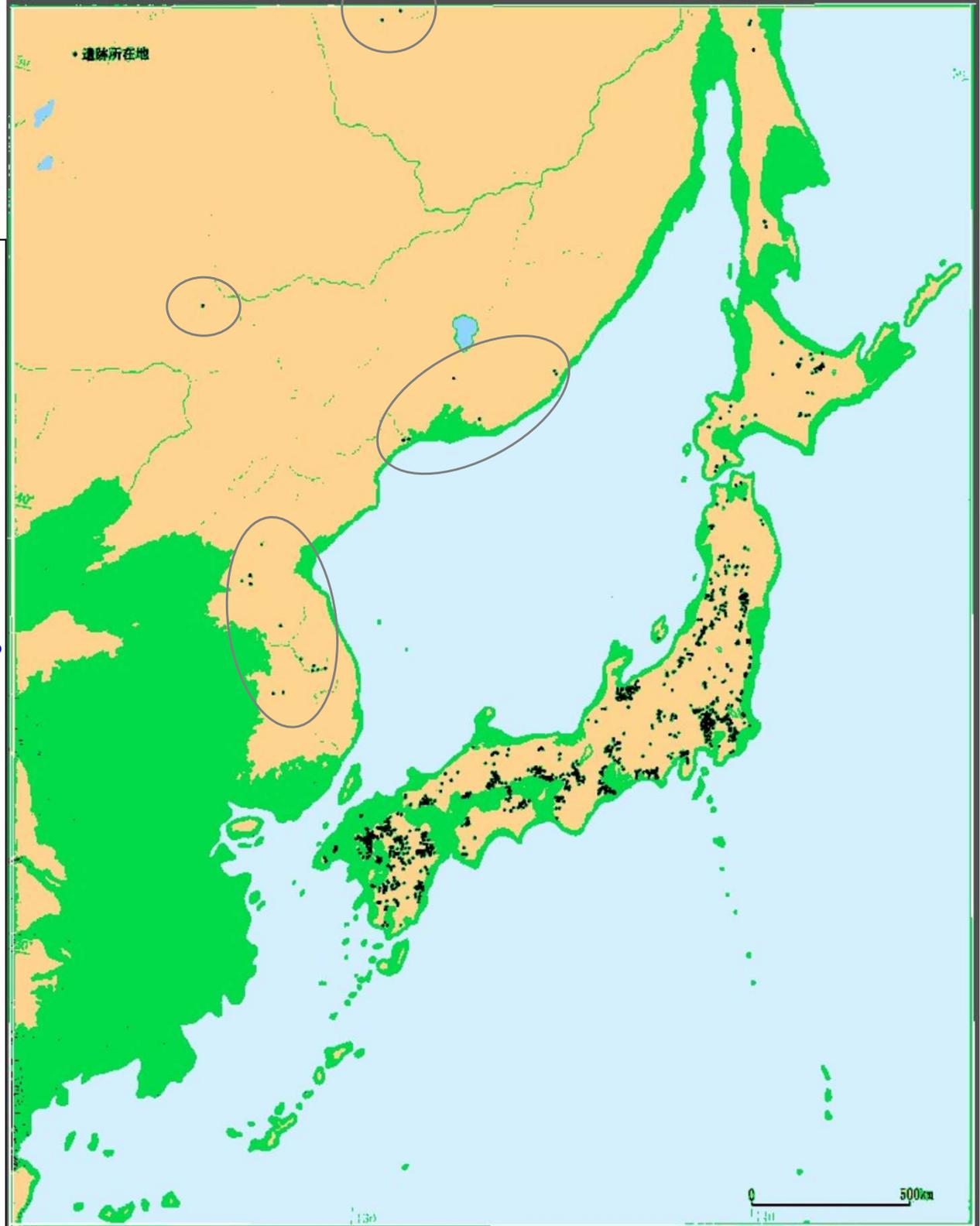
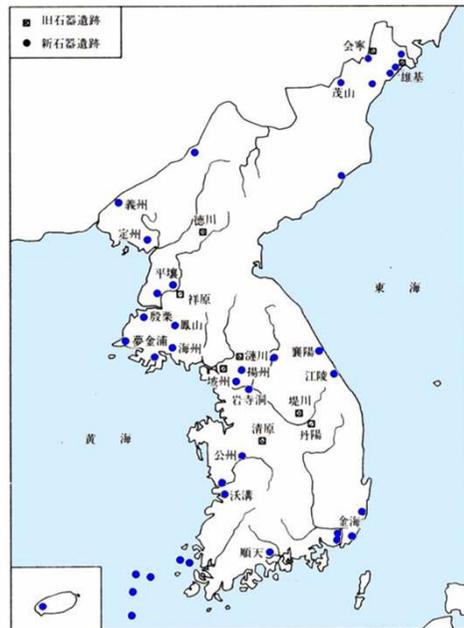
古朝鮮の勢力範囲



諸国の位置

考古学・地質学 などから見た 朝鮮半島と日本

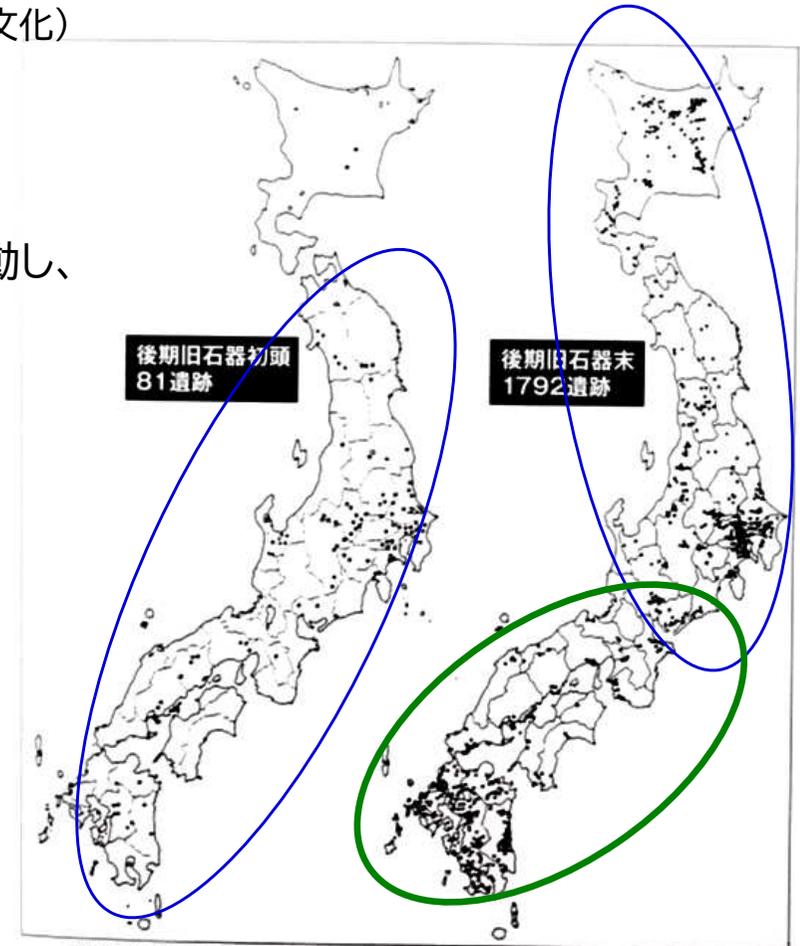
- 旧石器時代の遺跡の図(凡そ4万年前～3千年程前)
- 大陸の遺跡は、主に日本産の黒曜石を含む遺跡。
- 日本から旧石器人・縄文人が黒曜石製の石器を持って、サハリン・シベリア・朝鮮半島へ進出していたことが判る。
 - 右図は、最近の沖縄での多くの人骨の出た遺跡が反映していない。
- 韓国教科書に反映された遺跡の方が多い。
 - 日本の縄文人達が行ったのだろうか？



日本の旧石器・縄文のおさらい

- 約4万年前から3万5千年前の遺跡(左下図)は、日本中に広がる。
- 3万年前:鹿児島湾の始良火山爆発で、九州では全滅。四国・中国も被害。
 - 2万4千年前:桜島の北東30km耳取遺跡
 - 人類全滅の6千年後に、移住して来た人が居た(沖縄諸島から帆付サバニで到来か)。
- 1万6千年前:東北地方で、縄文式土器が生まれた。
- 1万4千年前:鹿児島県・梶ノ原遺跡:丸のみ型石斧・隆帯文土器(南方文化)
 - 1万3千年前:桜島-薩摩テラフの大爆発で壊滅的被害
- 1万7百年前:鹿児島県上野原遺跡桜島の北東25km:長期に存在。
 - アカホヤ火山灰{約7,300年前の鬼界カルデラ}の降下後、九州の甕式土器の担い手が山陰・山陽、さらに朝鮮半島南部で活動し、影響を与えているという[李相均1994]。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野原遺跡 (第4工区)	集落跡	縄文時代早期	縄文早期前葉住居跡 52基	前平式土器	
		縄文時代晩期	縄文早期前葉集石 39基	吉田式土器	
		弥生時代中期	縄文早期前葉連穴土坑16基	石坂式土器	
		古墳時代前期	縄文早期前葉土坑 約260基	撚糸文土器	
		古代	縄文早期集石 104基	押型文土器	
		中・近世	縄文晩期住居跡 2基	黒川式土器	
			縄文晩期土坑 28基	山ノ口式土器	
			縄文晩期掘立柱建物跡 2基	中溝式土器	
			弥生中期住居跡 8基	成川式土器	
			弥生周溝状遺構 3基	石鏃	
			円形柵状遺構 44基	石斧	
			柵跡 約60列	磨石	
			古墳住居跡 1基	石皿	



後期旧石器時代の遺跡数と人口動態 日本列島において4万から3.5万年前の環状ブロック群の遺跡は81か所(橋本2005)、2万から1.5万年前の細石刃石器群の遺跡は1792か所(堤2003)が発見されている。後期旧石器時代の2.5万年間で25倍の遺跡数の増加がうかがえ、一定の人口増を物語るデータである。

縄文土器は2系統 東北と九州

- 縄文式土器は、2種類が存在。東北＝縄文 九州＝貝文(爪文)
 - 従来の「朝鮮半島と日本の古代史」の話題では、九州の古い土器の話題は出ない！
{何故か、考古学者は、最古の九州の土器を忘れる}

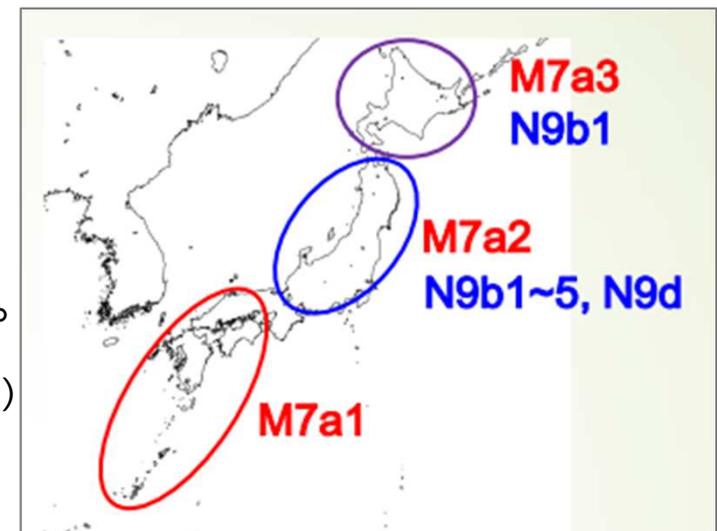


2 縄文文化

東京書籍・高校教科書・新選日本史B より

始良カルデラ爆発後、九州に移って来た縄文人について

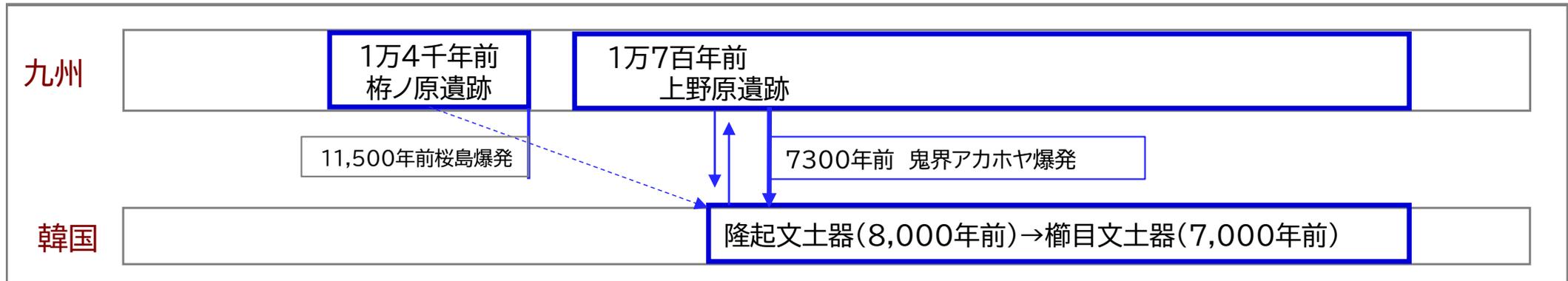
- 2万4千年前:桜島の北東30km耳取遺跡
 - 人類全滅の6千年後に、移住して来た人が居た。
 - 九州から西日本の人は、始良火山爆発後に
サバニ丸木舟で渡来した沖縄の旧石器・縄文人の子孫。
- 1万年前以降の沖縄人は、倭人と旧石器・縄文人の混血(西北九州縄文人)
 - 倭人と混血した縄文人が九州に渡来し、九州で繁栄
 - 黒川式土器・米を含む雑穀を畑作(焼畑)で栽培。



縄文人のミトコンドリアDNAの種類 神澤秀明資料

縄文時代 土器の交流

九州と韓国の土器の関連・



- 韓国・国立中央博物館 櫛目文土器の説明文
 - 韓国最古の土器は、
 - 紀元前6千年頃に製作された「隆起線文土器」であり、
 - 紀元前5千年頃、「櫛目文土器」が中西部地域で作られ、瞬く間に韓半島全土に広まった。

「日本出土の朝鮮産土器・陶器」 白井克也著

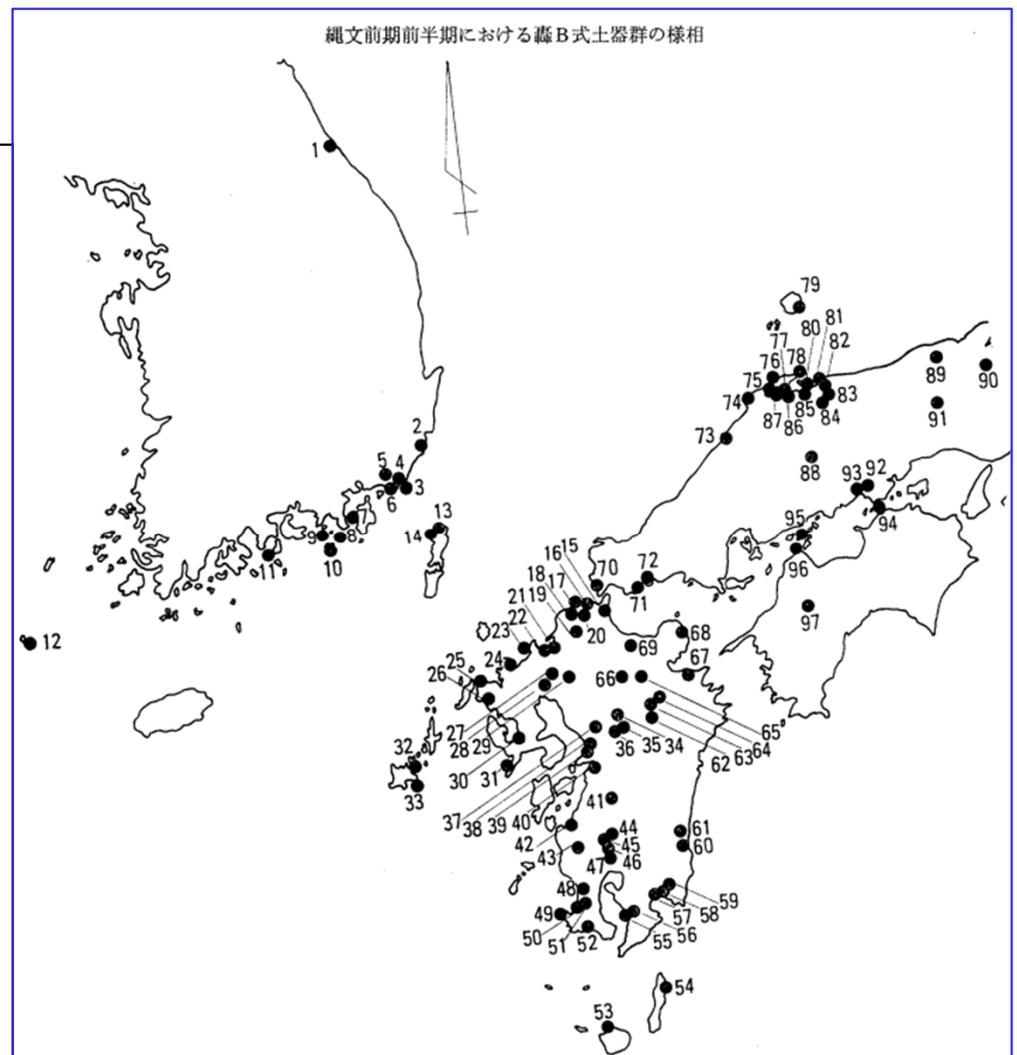
2. 新石器時代－縄文前期～後期

- 朝鮮陶磁の始まりは、いまだ不分明であるが、新石器時代早期には隆起文土器が現れ、日本の縄文前期に並行する。
- この時点から日本と朝鮮の交流がみられ、隆起文土器も日本での出土が知られている。
- 李相均によると、アカホヤ火山灰の降下後、九州の甕式土器の担い手が山陰・山陽、さらに朝鮮半島南部で活動し、屈曲型器形や胴張型器形の土器がそれらの地に影響を与えているという〔李相均1994〕。

(アカホヤ火山灰:約7,300年前の鬼界カルデラ:丸地記)

轟B式II群土器(隆起文土器)の拡散

- 縄文前期前半期における轟B式土器群の様相
 - 九州、山陰地方、韓国南岸を中心に - (1994)
 - 李 相均 (イ サンキュン) 著
 - 東京大学文学部考古学研究室研究紀要(2007/3/30)
- 縄文前期前半期の九州、山陰山陽、韓国南岸の地域では在地系の土器が存在していた。轟B式の第1段階に相当。
- 九州地域ではアカホヤ火山灰の降下で動植物が大きな打撃を受け、内陸山間部の地域では食糧の供給が十分でなくなり、海洋沿岸にたよる傾向が高まってきたと考えられる。
- 九州に起源を持つ轟B式II群土器が海路を通して山陰山陽や韓国南岸まで広がるものと考えられる。
- このII群土器はI群土器とあまり交じることなく、出土した数量もI群土器の方がはるかに多く、II群土器は数少ない。



1. 鰐山里
2. 新岩里
3. 東三洞
4. 瀛仙洞
5. 凡方
6. 多大浦
7. 山達島
8. 煙台島
9. 上老大島
10. 欲知島
11. 突山松島
12. 黒山島
13. 越高
14. 越高尾崎
15. 貫川
16. 黒崎
17. 山鹿
18. 新延
19. 目尾
20. 楠橋
21. 柏原
22. 四箇
23. 天神山
24. 菜畑
25. つぐめのはな
26. 岩下洞穴
27. 六本黒木
28. 船塚
29. 野口
30. 伊木力
31. 深堀
32. 堂崎
33. 大板部洞窟
34. 瀬田裏
35. 谷頭
36. 桑鶴土橋
37. 竜田陣内
38. 曾畑
39. 轟
40. 岩立C
41. 狸谷
42. 荘
43. 大畝町園田
44. 山崎B
45. 花ノ木
46. 山神
47. 桑ノ丸
48. 黒川洞穴
49. 西之蘭
50. 阿多
51. 上焼田
52. 永野
53. 一湊松山
54. 下剝峰
55. 榎木原
56. 鎮守ヶ迫
57. 野久尾
58. 片野
59. 鎌石橋
60. 赤坂
61. 内野々
62. 右京西
63. 下菅生B
64. 三反田
65. 二日市洞穴
66. 平草
67. 横尾
68. 羽田
69. 粉洞穴
70. 神田
71. 月崎
72. 美濃が浜
73. 久根ヶ曾根
74. 菱根
75. 後谷
76. 佐太講武
77. 西川津
78. 含壺塔下
79. 宮尾
80. 目久美
81. 魁ヶ口
82. 上福万
83. 下山南通
84. 長山馬籠
85. 陰田
86. 竹ノ花
87. タテチョウ
88. 帝釈峽遺跡群
89. 神鍋山
90. 志高
91. 皆木神田
92. 羽島
93. 島地
94. 大浦浜
95. 大見
96. 江口
97. 上黒岩

図1 縄文前期前半期の主な遺跡

韓国の新石器時代の人々

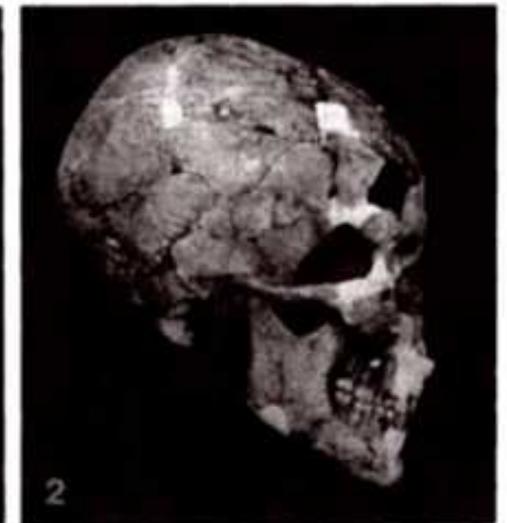
- 韓国の紀元前6千年以降に、磨製石器と土器(無文土器と隆起文土器→櫛目文土器)を使った人々は、誰か？
 - 磨製石器・日本産黒曜石・土器(九州)・竪穴住居など、日本のものと同一
 - 九州西北縄文人のDNAは、倭人と縄文人の混血。
 - 韓国南部・加徳島の6300年前の人骨のDNAは倭人と縄文人の混血。
 - 紀元前6千年以降に、韓国に住んで居たのは、日本・九州の縄文人(倭人と混血)(西北九州縄文人)
 - 韓国の国立博物館の展示も同様の表記があるので、縄文人が渡来したことは、一致した見解。
 - 現代韓国人の4%は、縄文人のY遺伝子を持つ。(Dong-Jik Shin et al 2001,)
 - 九州の縄文人が韓国に居たならば、黒川式土器・米を含む雑穀を畑作(焼畑)で栽培もしていた筈。
 - 黒川式土器は、韓国でも出土。

◆ 韓国国立博物館の展示



◆ 韓国・煙台島で発掘された前4000年紀頭骨

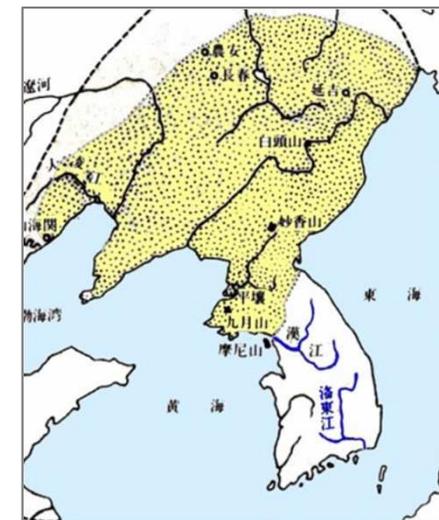
鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ『朝鮮半島出土土人骨の時代的特徴』1998年より
(15体中、前歯部が確認できた6体の頭骨の一例 『韓国人は何処から来たか』 p39)



中国文明との関連

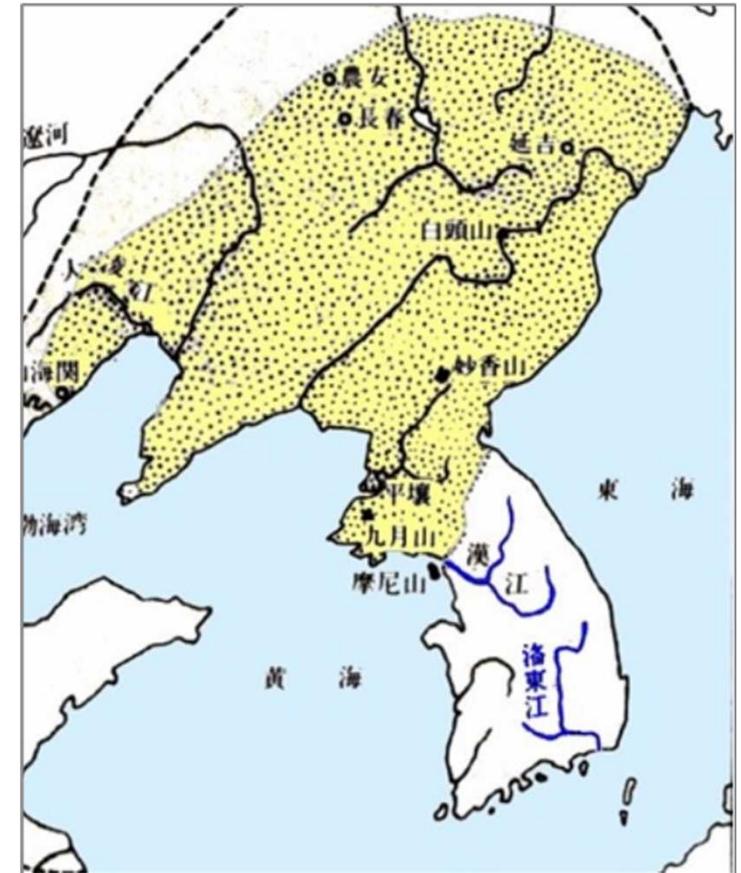
- 興隆窪文化（遼河流域）（8,200～7,400年前）
 モンゴル自治区から遼寧省
 - ヒスイなどの玉製品の出土する文化としては中国最古のもの。
 - 龍の出現する文化としても中国最古のものです。
- 紅山文化 遼河流域（5,400年前～4,300年前）
 農業を主とした文化
 - 彩陶文化の系統で、黒彩土器が発掘されています。細石器を特徴とし、玉器も出土しています。
 - 龍などをかたどったヒスイなどの玉から、現在の中国につながる文化や存在の可能性が考えられています。
- 夏家店下層文化 遼河流域（4,000年前～3,500年前）
 【内モンゴル自治区・遼寧省】
 - 北西は内モンゴル自治区東部のシラムレン川北岸から張家口にかけて、南東は河北省北部から遼寧省西部を中心とした文化です。
 - 生活の中心は雑穀栽培で、他に牧畜、狩猟、漁労も行われました。
 - 遺跡からは豚、犬、羊、牛、鹿などの骨がみついています。
 - 多数の大規模集落が発見されており、東アジアの気候が寒冷化した戦国時代や前後漢の時期よりも人口密度が高かったと推定されています。
 - 石器、骨器、陶器が見出されており、他に少数の金、鉛、漆器、翡翠、銅器、青銅器もみついています。
 - 陶器は三足型、銅器・青銅器は耳輪型が多く、骨を使ったト占も行われたようです。
- 遼河流域は、中国文明の中で、辺鄙な地域にも拘れず、古くから高い文明を持った地域。雑穀の栽培・牧畜・狩猟・漁労が行われ、青銅器も早くから使用された。
- 紀元前4世紀頃に成立した古朝鮮は、上記の影響を大きく受けた筈。

←
長江文明の
記載から



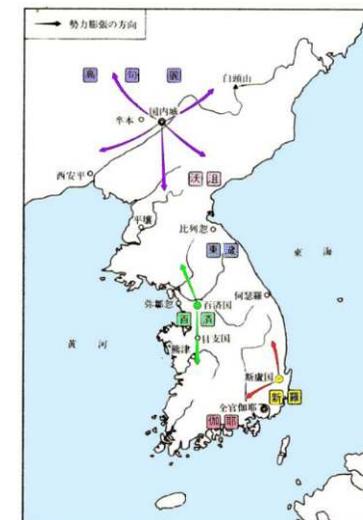
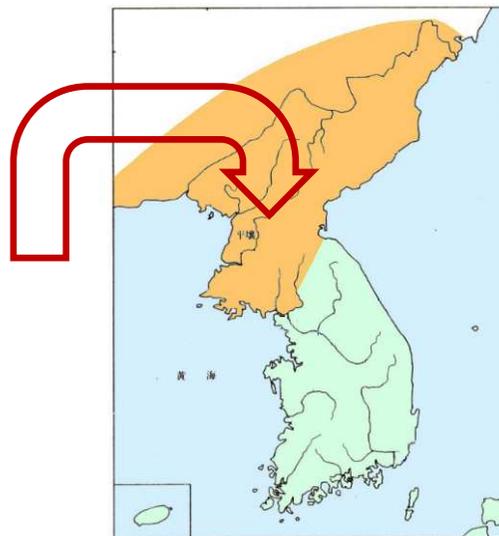
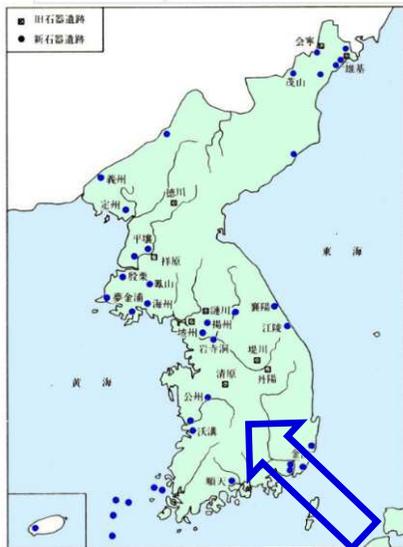
古朝鮮の成立

- 韓国の教科書では、檀君神話(紀元前2333年)からスタートするが、
 - 中国側の見方は、中国の国史(史記)に記載通りに箕子朝鮮がスタートとしている。
 - 箕子は殷王朝の一族で甥の紂王を諫めた。
 - 紂王を滅ぼした周の武からそのことを評価され、朝鮮に封じられた。
 - 朝鮮侯箕子は、殷の遺民を率いて、朝鮮に赴任した。(BC1046年以降)
- 195年頃燕に仕えていた満(衛満)は徒党1,000人を率いて朝鮮へと逃れた。
 - 箕子朝鮮の準王を滅ぼし、王となった。
- 殷末期の決戦:牧野の戦いを経験した箕子朝鮮も衛満朝鮮も、戦乱の中国で、十分に戦争経験を積み、軍備を整えた集団。古朝鮮の地域に居た、戦争未経験の民族(西北九州縄文人)との「争い」では力の差は大きかったと推測する。
- 古朝鮮の勢力範囲は、日本人がイメージする朝鮮とは違い、中国の遼東半島・満州・現在の北朝鮮を含む範囲
- 韓国の歴史教科書にも記される縄文人は、この古朝鮮成立にどのように対応したのだろうか？



朝鮮半島に住んだ九州西北縄文人

4000	1046		1000	300		108 ←BC	AD→	100	200	313	400	500	600	700
新石器文化	周成立	青銅器文化		鉄器文化普及	古朝鮮滅ぶ					高句麗	発展		滅亡	新羅
										楽浪郡	百済発展		滅亡	
										滅亡	新羅基礎		統一	



- 朝鮮半島に住んで居た九州西北縄文人は、紀元前千年の時期に、中国からの移住者の直面した筈。
 - 移住者は、中国での長期間の戦争経験を持ち、対人用武器を持った集団。住居は、周濠集落内。
(主な生活手段は雑穀栽培で、他に牧畜、狩猟、漁労も。陶器・青銅器を使用。非高床式住宅)
 - 勇敢な縄文人達も、対人武器・戦争に備えた集落を構える移住者には、なすすべも無かったと推定。
 - 北部の地域は諦め、朝鮮半島の漢江の南部へ退いたものと推定。
- 紀元前千年～紀元前108年:古朝鮮が滅ぶまでの期間に、先住民である西北縄文人に何が起きたのか？
(次頁以降に、検討する)
- 紀元前108年以降は、漢と戦い、負けて古朝鮮を逃れた古朝鮮一族が、難民として南下したと推定。
 - 西北縄文人と古朝鮮一族が、モザイク状に、又は地域を別けて、居住したと推定。

古朝鮮の時代：紀元前千年～紀元前108年

- 古朝鮮の時代:紀元前千年～紀元前108年:に朝鮮全土では
何が起きたのか？
- 古朝鮮を築いたのは、中国・殷の一族と満州/遼東民族
 - 生活様式:住居は非高床式(土/石の床に靴/土足)、
キビ・ヒエ・アワなどの雑穀栽培、牧畜など
 - 倭人(日本人)の生活様式とは、遠く離れている。
- 韓国の歴史教科書に記述の無い漢江以南の地域に起きていたこと
 - 水田稲作の開始
 - 支石墓・甕棺
 - 青銅製剣・石剣・管玉

-
- 古朝鮮は、日本人と日本文化とは違う。
漢江以南で発生したことは、関係がありそう。
松菊里遺跡について検討してみる。

松菊里遺跡

福岡市教育委員会 後藤直著
「朝鮮半島原始時代 農耕集落の立地」
図1 農耕遺跡分布 より

着色は丸地

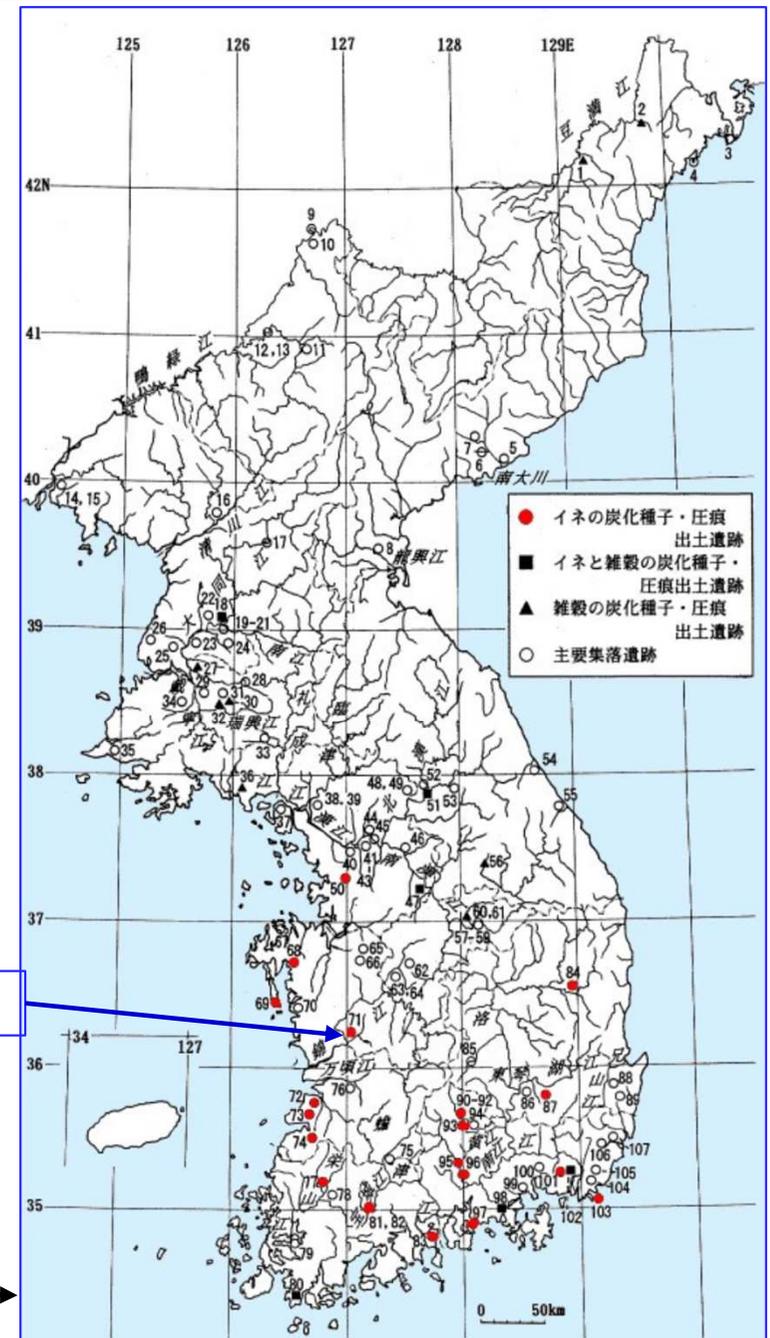


図1 農耕遺跡分布
遺跡名は表1参照。

松菊里遺跡(紀元前850～300年頃) ①

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

- 松菊里遺跡(ソングンニいせき 韓: 송국리 유적)は、韓国の忠清南道扶余郡にある中・後期無文土器時代(紀元前850～300年頃)の考古遺跡である。
- 松菊里遺跡は、1975年に発掘が開始され、青銅器、大きな筒状の緑石のビーズ、丸い平面形状の竪穴建物(松菊里様式竪穴建物)などが発見された。
- 44軒の竪穴建物が発掘され、中から典型的な中期無文土器文化後期(紀元前700～550年頃)の土器が出土。
- 中国遼寧式の青銅製短剣、多数の大きな筒状の緑石製装飾品、精巧に作られた石製短剣を持つ高位の石棺が含まれている。また多くの甕棺も出土している。(幼児用土器棺)
- 土器は無文土器。
- ✓ 水田稲作を行う。炭化米や石包丁が出土。



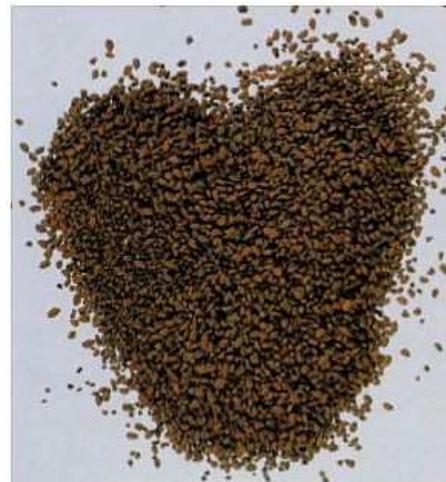
遺跡全景



無文土器 鉢 高: 13.5cm(右)



無文土器 高: 47cm(中央)



松菊里遺跡54-1号住居跡から発見された多量の炭化米 (上)

松菊里遺跡 ②

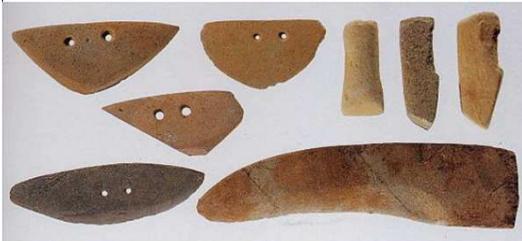


方形住居址(54-5号)



円形住居址(55-3号)

松菊里型住居:丸形と角型がある。



石包丁・石鎌・快入石斧 長さ 25.4cm(石鎌)



石鎌・石剣 長:13.2cm(右)



紡錘車・柱状石斧・扁平片刃石斧 長:11.2cm(中下)

扶餘 松菊里甕棺墓

青銅器時代

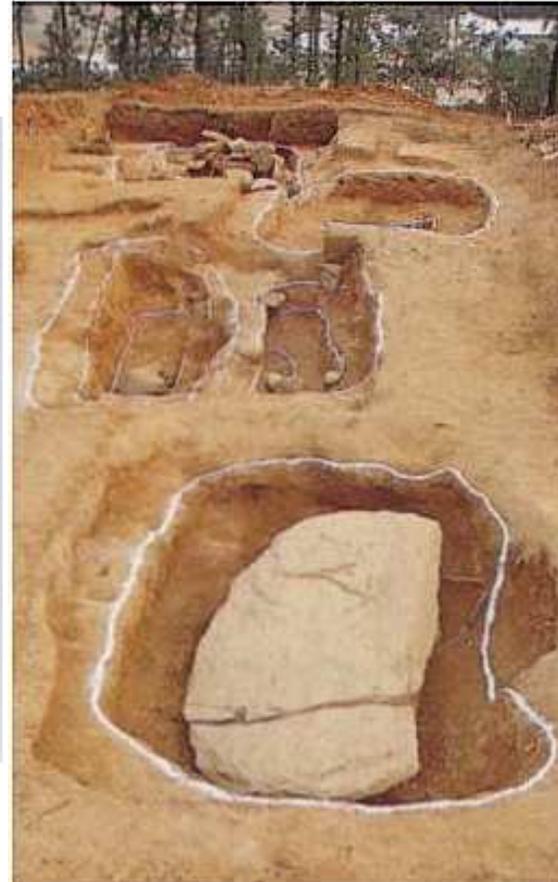
甕棺よりやや大きな穴を上下2段に掘り、甕棺を立てて埋め、石で蓋をした墓である。甕棺は、日常に使っていた大きな松菊里型土器をそのまま利用したもので、土器の底に穴を開けているのが特徴である。甕棺の中には主に管玉が副葬された。甕棺の大きさからみて、乳幼児の墓と推定される。

年代は、松菊里住居址や石棺墓と同じく、紀元前5～4世紀頃と推定される。



無文土器 甕棺 高:46.8cm

松菊里 石棺墓



管玉 長:0.7~3.3cm



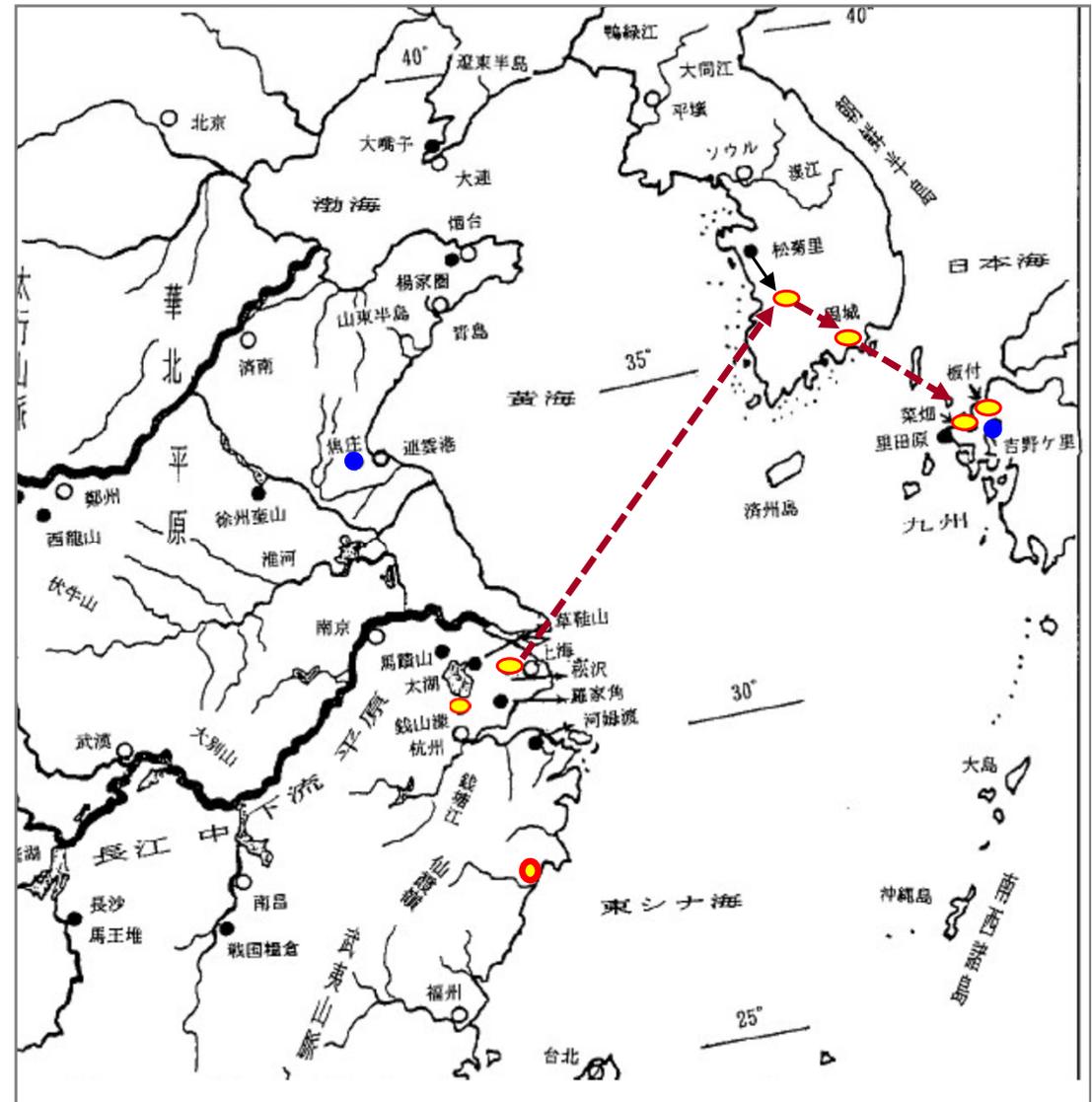
ガラス玉 長:1.0cm

松菊里のイネの品種

- 松菊里で出土した炭化米を調査し、中国/日本出土のイネと比較判定した結果、
 - 松菊里の短粒型の稲粒は、紀元前4-3千年の長江下流域の遺跡(崧澤・銭山漾など)に存在した。
 - 朝鮮半島南部海岸近くの固城遺跡にも、同様の短粒型の稲粒が存在。
 - 更に、唐津の菜畑/福岡の板付け遺跡にも同様の短粒型の稲粒が存在。
 - 古朝鮮の文物は、北部中国からはいって来たが、水田稲作は、イネの品種から見ると、南方の長江下流域から直接松菊里に入ったと見られる。
 - 図中の松菊里の位置は、やや北方に置かれていたが、地図を確認した処、違っていたので修正しました。

(以前にも同じ図を使いましたが、これも要修正)

- 尚、米の渡来ルートで、山東半島→遼東半島→北部韓半島→南部韓半島→日本 との説もあるが、遼東半島の大嘴子遺跡出土米の米粒特性が他の地域には見られない特異な地方種であり、北方の早生化した品種が晩生化することはい難いことから、最も可能性の低いルート(和佐野喜久雄)



支石墓と初期水田稲作の渡来ルートの図
和佐野喜久生編集「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」中の遺跡の分布図に追記

朝鮮半島の支石墓は二つに大別 — — — 松菊里遺跡は？

平成26年度 東アジア国際ミニシンポジウム 支石墓の謎・墓地にみる日韓交流
 埼玉大学 中村大介 「支石墓にみる日韓交流」

— 2種類と分布

テーブル(卓子)式:北方式、 碁盤式:南方式
 地上式主体 地下式主体



【卓子式】海城析木城（高さ約2.7m） 【碁盤式】金海茂溪里（上石の長さ：6.1m）
 図1 卓子式支石墓と碁盤式支石墓の典型例

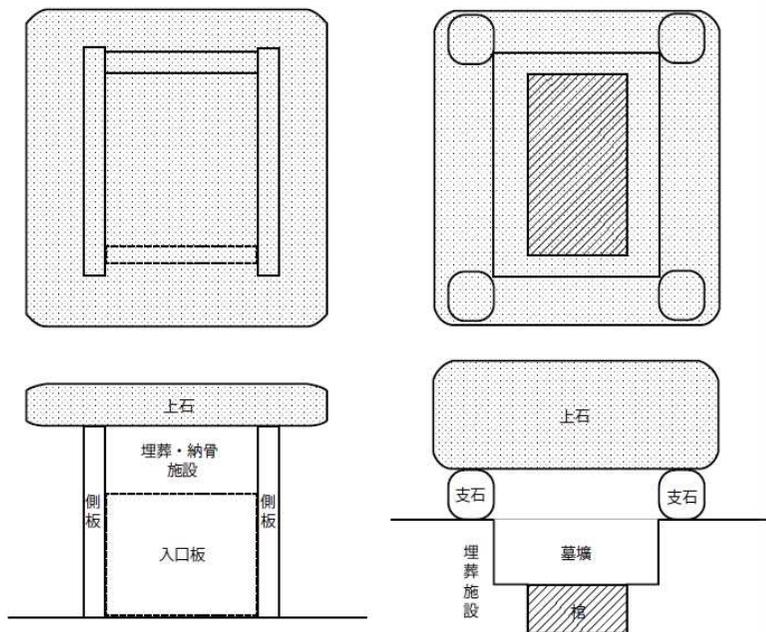


図2 支石墓における各部位の名称

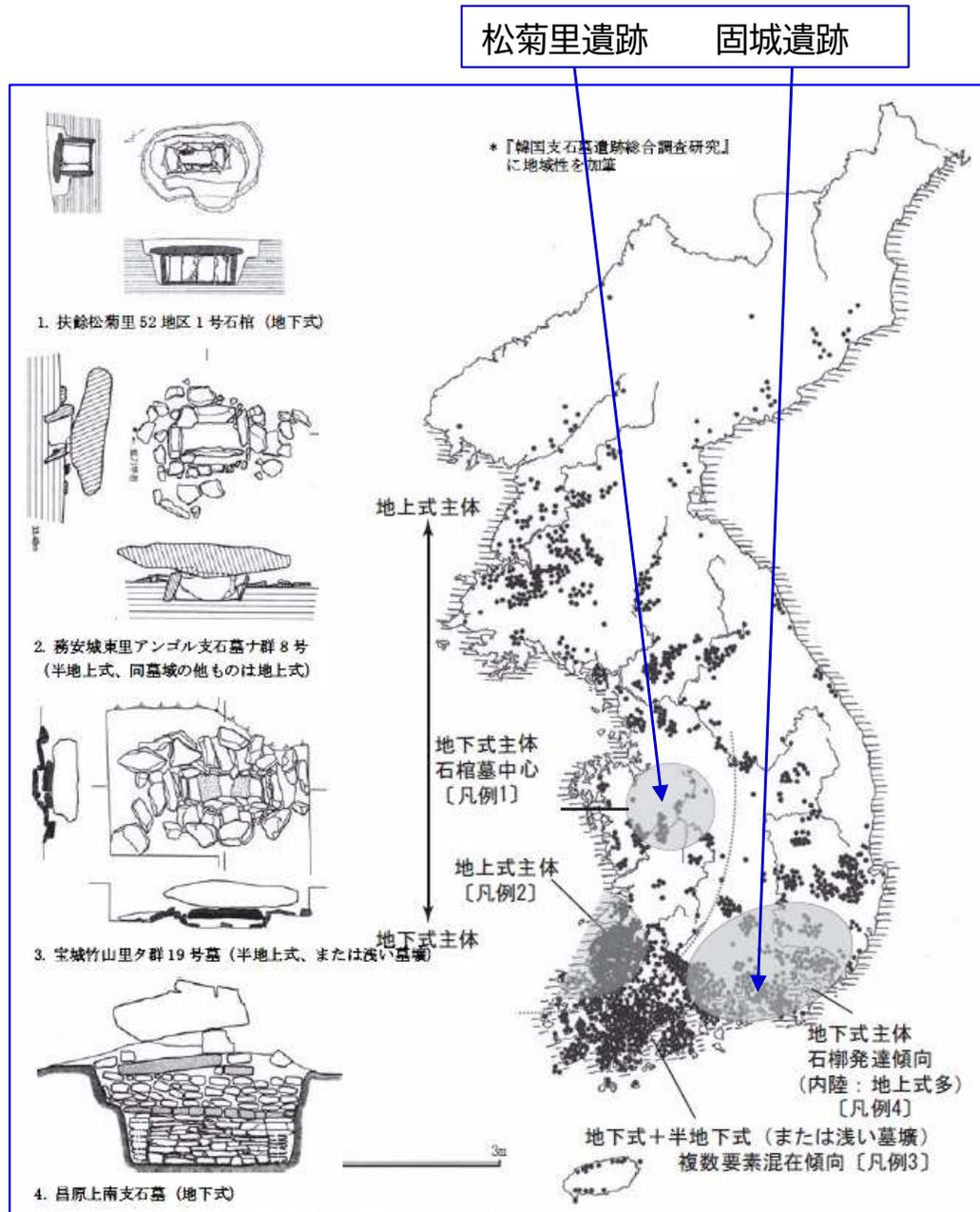
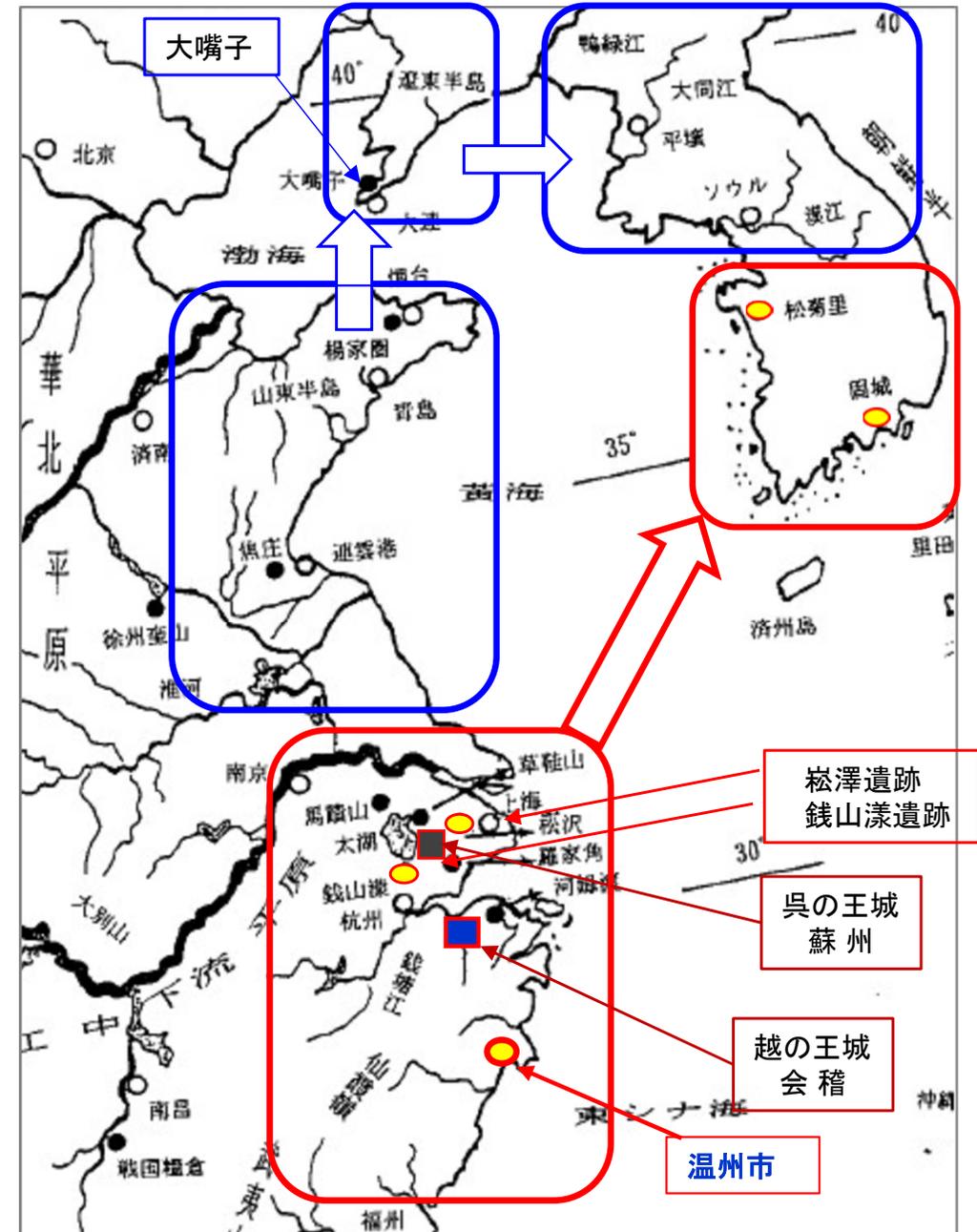


図5 埋葬施設構築位置における朝鮮半島の墓制の地域性

韓半島の支石墓渡来の歴史

- ① 山東半島などで発見される石棚墓は、東夷の墓制で、支石が高く、上に乗る石が巨大なことが特長。
紀元前1500年頃に遼東半島付近に伝播し、殷(商)の王族の一族である箕子の朝鮮移住に伴い、韓半島北部に広まった。
韓国ではテーブル式支石墓と呼ばれている。
- ② 浙江の南温州市で発掘された石棚墓群の形状は、支石が低い形式のもので、やはり東夷の墓制と言われる。
これと同様の墓が、紀元前500年頃、韓半島の南部へ伝播した。
韓国では、碁盤式支石墓と云われる。
- ✓ 浙江省の銭山漾・崧澤遺跡で出土している米の品種は短粒型の稲種で、これと同じ短粒型の米は、韓半島初期の水田稲作の遺跡である松菊里・固城遺跡から出土する。
✓ イネの品種と支石墓のタイプは、同じ地域からの伝来を示す。



松菊里型住居

- 松菊里型住居は、竪穴住居の一種で、床中央に大きな穴があり、そのわきに小さな柱穴ある。主に円形だが、方形のものもある。
- 日本では北九州に多いが、瀬戸内海沿岸などにも広がり、愛知県の朝日遺跡でも出土。
- 初期水田稲作の広がった地域に多いが、実は、水田稲作集落の主要な住居形式では無かった。集落の一部に松菊里住宅が存在することもある程度。

➤ 松菊里遺跡(及び固城遺跡)のイネと水田稲作が、日本伝播したことは明白。

- イネの品種
- 支石墓
- 松菊里型住宅
- 遼寧型青銅製剣
- 石剣
- 石包丁

松菊里型住居分布図



松菊里遺跡：古朝鮮の時代：紀元前千年～紀元前108年

- BC1000～BC108年の間に起きた出来事の一つとして、松菊里遺跡をあげる。
- 松菊里の位置は、古朝鮮の領域からかなり離れた南部に存在。
 - 古朝鮮の箕子/衛満の影響力の及ばなかった地域。
 - 韓国歴史教科書がいう処の新石器時代から、日本の縄文人(西北縄文人)が居住した地域。
 - 出土する物は、
 - 青銅製剣：遼寧式の剣で、古朝鮮で使用されていたもの
 - 無文式土器：松菊里型土器
 - 支石墓：古朝鮮のテーブル式では無く、長江河口流域から南方の碁盤式支石墓。
 - 水田稲作：古朝鮮には水田稲作は無く、長江河口流域の短粒米
- 海を越えて、長江下流域の文物の渡来が可能で有ったのか？
この頃の中国では、
 - BC500年頃、齊国とその南方の呉と越が、「海上の三強」と称された。
 - BC485年、呉王が水軍を率いて、齊の海域で戦った。
 - 呉が破れ、勝った齊は「海王の国」と呼ばれた。
 - その3年後、越は2千人の水軍で呉を攻め、これにより、呉は滅びた。
 - その一部が、韓国へ逃れたと云われる。
 - BC472年、越は8000の水軍と300隻の軍船で、齊に遠征し、勝利。
- 半島と言う地勢上の条件から、地続きの大陸側からの侵入と海からの侵入の両方があり得る。
 - BC1000年以前には大陸側から侵入が有り、古朝鮮が成立し、継続した。
 - BC500年頃には、海からの侵入があったものとする。

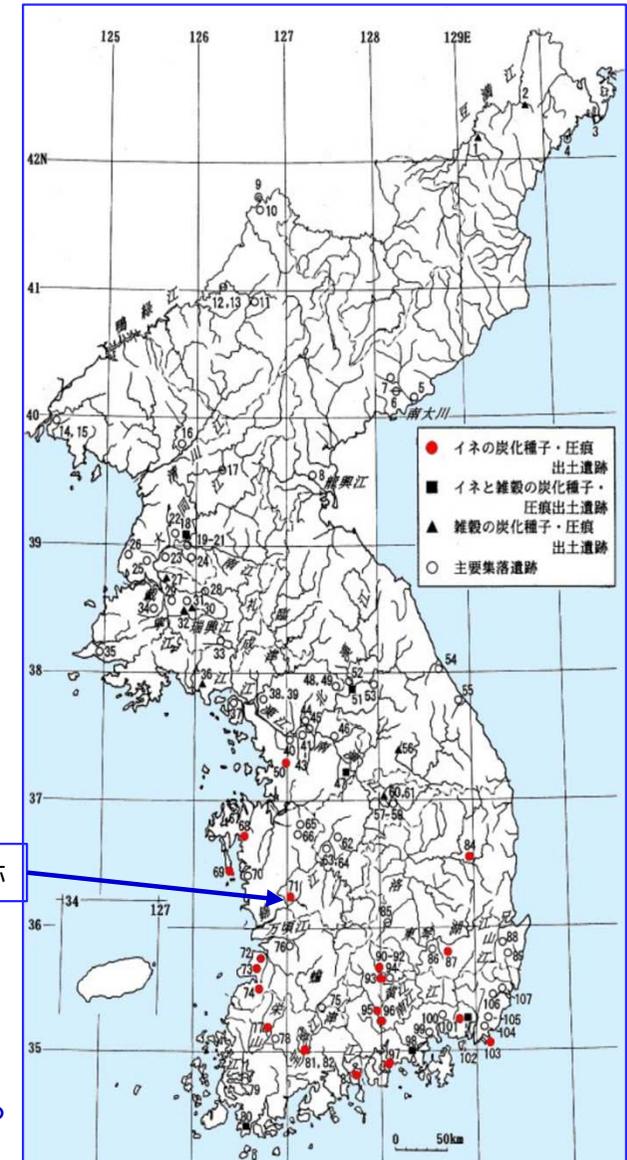


図1 農耕遺跡分布
遺跡名は表1参照。

日本最初の水田稲作と文化 及び 弥生渡来民

	初期水田耕作民	弥生渡来民
主要遺跡	唐津・菜畑/糸島・曲り田/博多・雀居・板付	須川・吉野ヶ里・安永田・立石・その他
土器	突帯文式土器	遠賀川式土器(弥生式土器)
集落 水田 耕作地	環濠集落も一部に見られる。 中小河川又は谷間の流れを灌漑に利用した水田を構築。 米と共に海洋性食料を取っていた。 海岸沿岸又は、河口に近い河川沿いに集落を構築。	環濠(壕)住宅も見られる。 山沿いに灌漑水路を設け、自然河川に排水する 高度な灌漑技術を駆使した水田(水を抜くと乾田になる) 現在の水田と同様に、平野部、河岸段丘などを耕作地とすること可能。 海岸から離れた地域も耕作地、集落用地となった。
イネの 品種	極短小米 : 韓半島の松菊里・固城遺跡と同一種で 長江下流域(春秋呉の支配地)の松澤・銭山漾遺跡 の品種と同一	極短小米は消滅。 やや長い小粒米 : 全国に展開 韓半島には同一品種のイネはない。 山東半島付け根の地域の焦庄遺跡〔徐福村に近い〕と同一品種
住居	松菊里型住宅 (方形又は円形)もあるが 従来型の 竪穴住宅 が主体 松菊里型住宅が多い集落も一部にある。	高床式住宅 寒さ対応された床下が板材で覆われた高床式住宅 (この住宅を誤って竪穴住居として復元している)
墓制	碁盤式支石墓 : 支石の下には土壌又は木棺 韓半島南部に多い方式。 中国浙江省にも源流が見られる方式	甕棺墓 が特徴的 初期には、支石墓の下に甕棺を置くことがある 木棺墓・石棺など
武器	青銅製剣・磨製石剣・磨製矢じり	青銅製剣・矛・戈 鉄剣・矛 鉄鏃 連弩
人種	支石墓に眠る人骨は、 低顔・低身長 の縄文人 の特徴を持つ 渡来した民族は、 韓半島に逃避していた 中国難民(春秋の呉の末裔) 人数は数百人規模以内	縄文人の海洋民が、 韓半島に渡来していた春秋呉 の難民と 水田稲作技術を招聘して、 北九州に殖民したもの。 主体は 縄文人の海洋民 高身長・長頭・シヨベル型前歯 (上の前歯が下の前歯に覆い被さる・現代人と同じ) 中国長江河口から山東半島までの海岸沿いの人々に類似 韓半島人にやや類似

土器 : 古朝鮮の時代: 紀元前千年～紀元前108年

- 初期の水田稲作は、松菊里・固城の稲作が日本へもたらされたとする。
- 同時に使用された土器は突帯文式土器で、北九州から水田稲作の拡散に伴い瀬戸内海から畿内へ広がったと云われる。

(松菊里の土器と突帯文式土器は似ていない。)

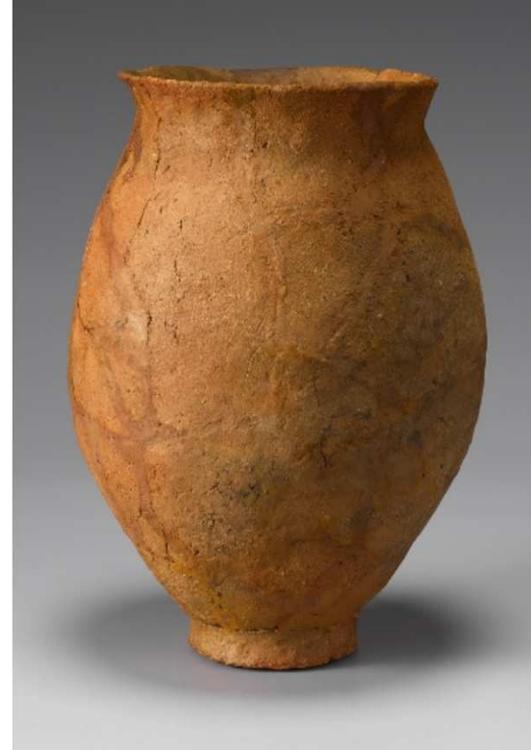
- その後、弥生式土器(遠賀川式土器)が九州から日本全国へ拡散する。
- ✓ 朝鮮半島から日本へもたらされたとする土器について、検討する。



無文土器 高:47cm(中央)



無文土器 鉢 高:13.5cm(右)



山ノ寺式土器
(菜畑遺跡)

夜臼式土器
(板付遺跡)



夜臼式土器

板付式土器



「断面円形粘土帯土器」
松菊里型土器の外に、朝鮮半島で出土する同時期の土器



福岡市埋蔵文化財センター

無文土器集合 姪浜5次・姪浜・那珂30次

突帯文式土器

- 国立歴史民俗博物館 藤尾信一郎著「水稲農耕と突帯文土器」の記述によると
 - 早期に玄界灘沿岸ではじまった水稲農耕は、朝鮮半島に系譜を求められるものであるが、
 - 水稲農耕に関する文化複合体のすべてがみられるわけではない。
 - 煮沸用土器は玄界灘沿岸の突帯文土器を使用した。
 - 突帯文土器は、縄文土器に伝統的な製作技法で作られている。
 - 韓国にも突帯文土器が存在する。
 - 板付Ⅰ式に共伴する突帯文土器に一番近い印象をもった。
 - 松菊里遺跡の土器と唐津・菜畑/福岡・板付遺跡で使用された土器には違いが有り、菜畑/板付で使用されたものは、西北縄文人が使用していた土器である突帯文式土器であったことになる。
 - 土器の形式としては、
 - 山の寺式→夜臼式→板付Ⅰ式
(板付Ⅰ式に関しては、取り扱いが微妙、突帯文式土器で、後の弥生式土器とは異なるもので、板付けⅡ式から弥生式土器となる記述が多い)
 - 松菊里型では無い、断面円形粘土帯土器を調べ直して、朝鮮半島から日本へとの流れを示す論文も出ている。この土器は、水田稲作伝播の流れとは一致しない。
- 初期の水田稲作では、土器は同時に渡来したのではなく、土器は、従来から西北縄文人が使用してきたものを使用。(用途に合わせて土器の作りを替えたもの)

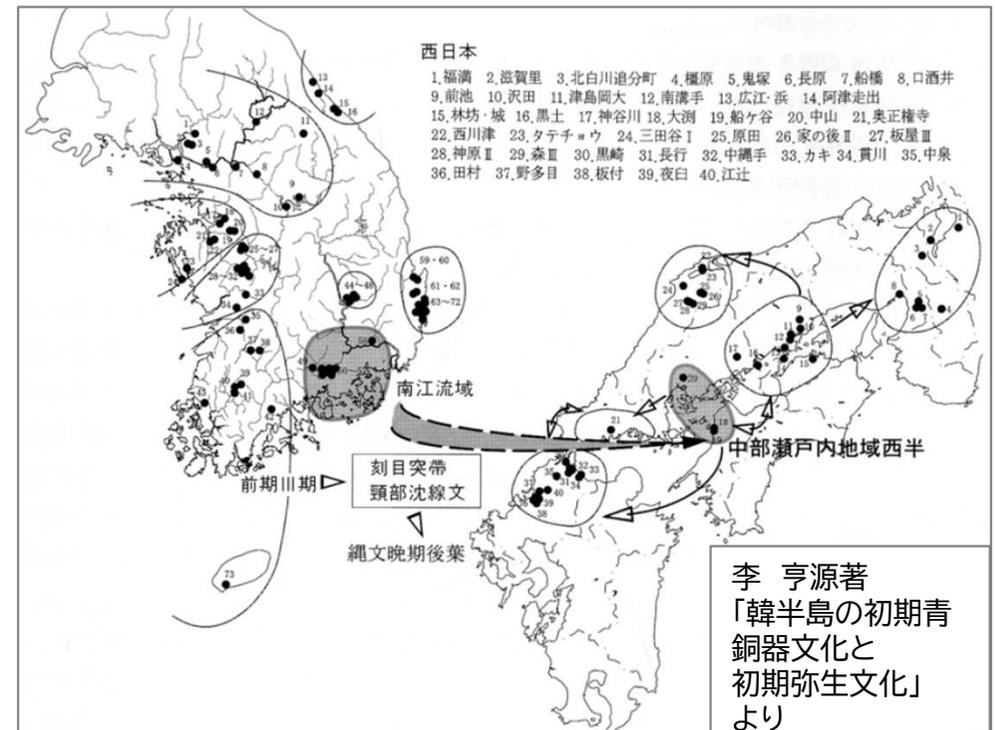


図4 青銅器時代前期の土器編年と縄文晩期の併行関係(上), 韓日地域にみられる突帯文土器の関係(下)
[千羨幸 2009]

古朝鮮の時代：紀元前千年～紀元前108年

- 水田稲作開始と云う、画期的なことが、朝鮮半島南部:松菊里で起きていた。
 - 日本への稲作の伝播が引き続きを起し、注目する処。
 - 松菊里で特徴的なことをあげると
 - 青銅製剣：遼寧式の剣で、古朝鮮で使用されていたもの → 日本へ
 - 無文式土器：松菊里型土器
 - 支石墓：古朝鮮のテーブル式では無く、長江河口流域から南方の碁盤式支石墓。 → 日本へ
 - 水田稲作：古朝鮮では水田稲作は無く、長江河口流域の短粒米 → 日本へ
- 整理すると
 - 北の領域では、満州・遼河領域及び中国の殷の系統の人々が移住して、古朝鮮として成立した。
 - 中国での激しい戦争体験と青銅製武器を持ち、生産基盤は、雑穀農業/牧畜などであった。
 - 従来その地域で生活していた西北縄文人達は、追いやられたものと見られる。
 - 南側の半島部分では
 - 西北縄文人が生活を続けた。
 - 古朝鮮の文化と人が、来たから入って来た。
 - 海路、長江流域から水田稲作と支石墓(碁盤式)をもって呉越の人々が来た。
 - この新しい水田稲作の技術と文化は、日本へも伝播した。
- 古朝鮮が滅びるまでの期間には、北から南からの新文物が入ってきたが、更に新しいものが入って来たと思われる。それを以降に記す。

土器に関して、朝鮮半島と日本の関係

- 今までは、「朝鮮半島の土器が、日本へ渡来し、弥生土器となった。」と学んできた。
 - しかし、最初の稲作では、朝鮮半島の松菊里の土器が日本へ渡来した訳では無いことが判った。
- 日本と朝鮮半島の土器の併行関係を、右の表が示しており、論者により解釈の違いが存在することが判る。
- 朝鮮半島側の勒島式について面白い記述/論文があるので、以降、勉強し、紹介する。
- ✓ 板付I/II式は、縄文系の突帯文土器とも見られる。
(安楽勉著:「津島・吉岐における刻目突帯文式土器の様相」では、板付I/IIを刻目突帯文式土器としている。)
- ✓ 城ノ越式以降が、遠賀川式と理解する。

表6 弥生土器と粘土帯土器の併行関係に関する研究成果

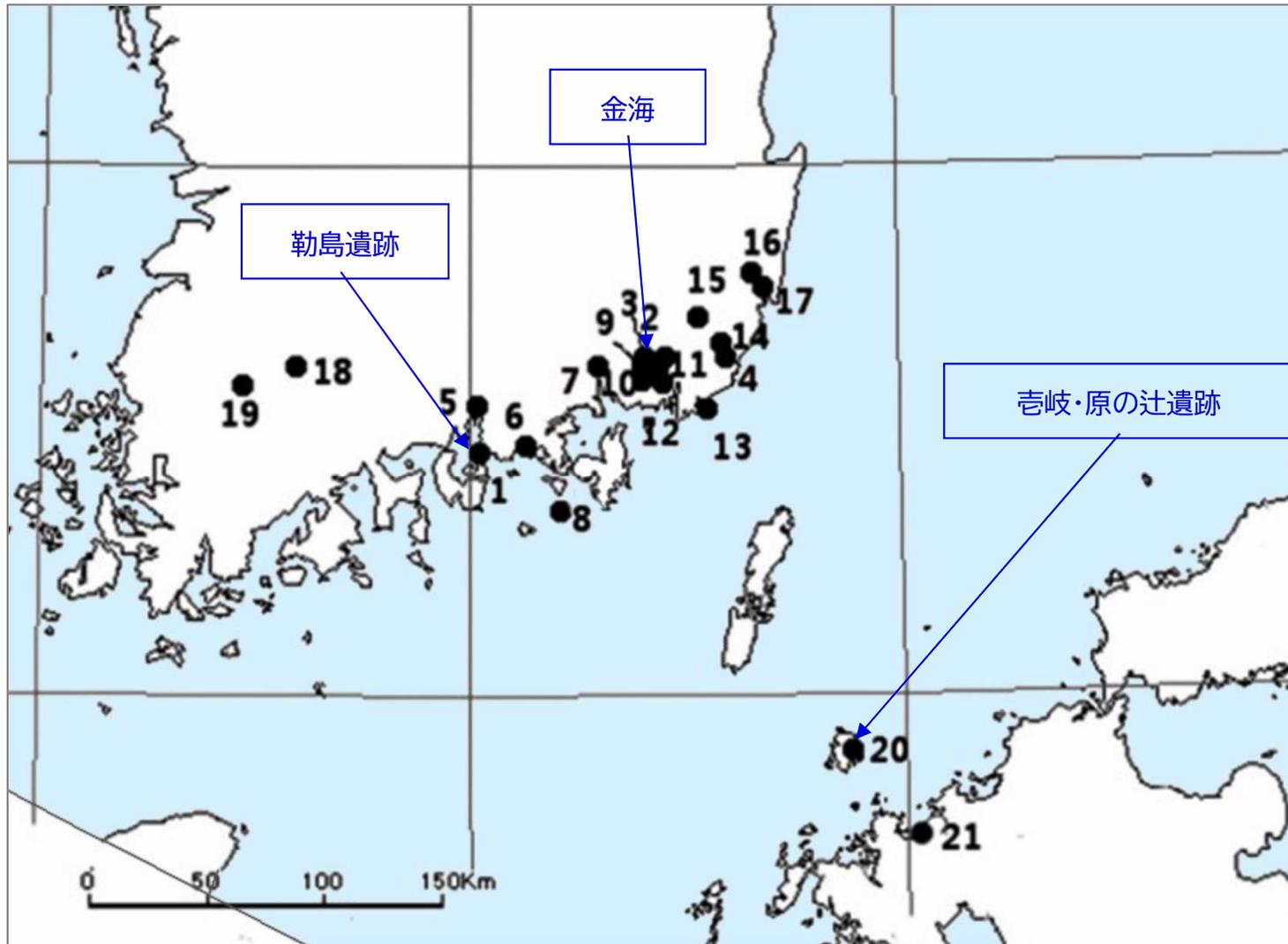
弥生時代	土器型式	後藤直 1979	片岡宏二 1990	武末純一 2003	白井克也 2001	安在皓 徐始男 1990	申敬澈 鄭澄元 1987	安在皓 洪漭植 1990	李在賢 2003	李昌熙 2004								
前期	初頭	夜白IIb式 板付I式	松菊里式	松菊里式	松菊里式	松菊里式	松菊里式	松菊里式	松菊里式	松菊里式								
	中頃										板付IIa式	松菊里式						
	後半										板付IIb式	松菊里式						
	末										板付IIc式	松菊里式						
中期	初頭	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式	城ノ越式								
	前半										須玖I式	須玖I式	須玖I式	須玖I式	須玖I式	須玖I式	須玖I式	須玖I式
	後半										須玖II式	須玖II式	須玖II式	須玖II式	須玖II式	須玖II式	須玖II式	須玖II式
後期	前半	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式	高三瀨式								
	後半										下大隈式	下大隈式	下大隈式	下大隈式	下大隈式	下大隈式	下大隈式	
	末										西新式	西新式	西新式	西新式	西新式	西新式	西新式	
		日本				韓国												

「環朝鮮海峡における粘土帯土器の実年代」より
 李昌熙. 博士(文学)著
 総合研究大学院大学. 文化科学研究科. 日本歴史研究専攻

「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」 石丸あゆみ著 ①

- 東京大学考古学研究室研究紀要第25号(2011)に掲載された『朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉－靑島遺跡・原ノ辻遺跡出土事例を中心に－』石丸あゆみ著 を紹介する。
 - 長崎県壱岐島にある原ノ辻遺跡と、朝鮮半島南部の金海地域を中心とした地域を対象として取り上げている。
 - 靑島遺跡は、金海地域の中心遺跡
- 朝鮮半島出土弥生系土器の出土事例は、近年の発掘調査増加に伴い劇的に増加しているため、多数の出土品を使って、統計的処理を行うことも可能となり、検討が進んだ。
- 研究史と問題点の抽出と言う観点から
 - 原ノ辻遺跡出土朝鮮半島系土器の研究は片岡宏二氏の業績が大きく、
 - 常に朝鮮半島の影響を受けていたという見解を示した(片岡1997,1999)。
 - 白井克也氏は、無文土器三韓土器楽土器の朝鮮半島系土器の分布をまとめ、
 1. 弥生時代前期末から中期初頭:韓人が北部九州に渡来移住し、西日本各地に青銅器鉄器をもたらし
 2. 中期前半:倭人の側からの積極的な交易の展開により、靑島貿易が盛んにおこなわれた。
 3. 弥生時代中期後半:靑島遺跡は交易拠点としての機能を終え、代わりに、倭人・韓人が交易に従事し、原ノ辻貿易が行われた。
 - 朝鮮半島出土の弥生系土器研究と、それに先駆けて進められてきた日本列島出土の朝鮮半島系土器研究により、様々な角度から日韓交渉像の復元が試みられてきたが、
 - 2001年まで3年にわたって行われた靑島遺跡の発掘調査では、多数の弥生系土器が新たに確認され、最近の韓国での弥生系土器資料の増加により、従来の認識とは異なる事実も明らかとなっている。

- 朝鮮半島の弥生系土器 出土地
- 時期を2段階に区分する
 - I期：城ノ越式から須玖I式古段階、
 - II期：須玖I式新段階から須玖II式
- 土器の特性：弥生土器をB類 / 弥生土器の忠実模倣品をA類



	遺跡
1	泗川勒島遺跡
2	金海亀山洞遺跡
3	金海大成洞焼成遺跡
4	釜山萊城遺跡
5	泗川芳芝里遺跡
6	固城東外洞遺跡
7	昌原茶戸里遺跡
8	統榮葛島遺跡
9	金海会峴里
10	金海興洞遺跡
11	金海池内洞
12	金海北亭貝塚
13	釜山朝島貝塚
14	釜山温泉洞
15	梁山北亭洞
16	蔚山達川遺跡
17	蔚山梅谷洞遺跡
18	光州新昌洞遺跡
19	南原細田洞遺跡
20	原ノ辻遺跡
21	御床松原遺跡

- 弥生前期は、夜臼式/板付I式/板付II式の時代で、弥生中期は、城ノ越式/須玖I/II式以降とする。
- 朝鮮半島の土器である断面円形粘土帯土器が、北部九州の弥生時代前期の集落から、まとめて出土する。
 - 弥生時代前期段階の日本の土器は、朝鮮半島内の遺跡からの出土は少ない。
- 朝鮮半島の断面三角形粘土帯土器の、日本での出土は、圧倒的に少ない。
 - 弥生時代中期段階の土器は、朝鮮半島へ多く搬入され、出土数が多い。
- 弥生前期には、朝鮮半島の土器(円形粘土帯土器)が日本へ運ばれ、弥生中期では、弥生土器が朝鮮半島へ運ばれた。

◆ I期(弥生前期)

- 従来の説:人や文物の主な流入の流れは、朝鮮半島から日本へ
- 今回確認:人や文物の主な流入の流れは、朝鮮半島から一方的には無く、金海地域に、弥生土器が流入。

◆ II期(弥生中期)

- 中期初頭から前半期 : 朝鮮半島からの土器の流入は急激に鈍化。
 - 反対に、日本側からの朝鮮半島への土器の流入は本格化する。
 - 金海地域への弥生土器の流入は無くなる。
- 靑島遺跡では、最も多くの弥生土器が流入する。
 - 靑島へ流入する土器には大型の甕は無く、中型/小型の甕。甕形状も、蓋(木製か)の使用に適したもの。
 - 運搬用具。直系35cmの大型甕は船の運搬に不適。
 - 原ノ辻遺跡出土弥生土器と様相を同じくするA類(忠実模倣品)で、原の辻から靑島へ送られた。
- ✓ 須玖II式の袋状口縁壺などの糸島地域特有の土器が多く原ノ辻にもたらされることから、原ノ辻を中継地とした交易に糸島地域の集団が深く関わっていると考えられる。
- ✓ 鉄鉾山にある蔚山達川遺跡出土の壺は、須玖II式の北部九州からの搬入品。鉄器生産に直接関係する遺跡から弥生系土器が出土した意味は大きい。

まとめると次のようになる。

- 朝鮮半島の弥生土器は、出土は少なかった。2001年から3年間の靑島遺跡の発掘調査で、弥生系土器の試料数が特に増加し、再検討が行われた。
- 弥生前期を夜臼式・板付I/II式土器、弥生中期を城ノ越式・須玖I/II式土器の時代と区分すると、
 - 前期では、朝鮮半島の断面円形粘土帯土器が、朝鮮半島から日本へ流入。人や文物の流れも同様。
 - 中期では、朝鮮半島からの流れは鈍化。日本から朝鮮半島への土器の流入は本格化。
 - 須玖II式の袋状口縁壺などの糸島地域特有の土器が多く出土し、糸島地区が、朝鮮半島・日本の流通の鍵をにぎる。朝鮮半島の鉄鉾山にも関わりがあったことになる。

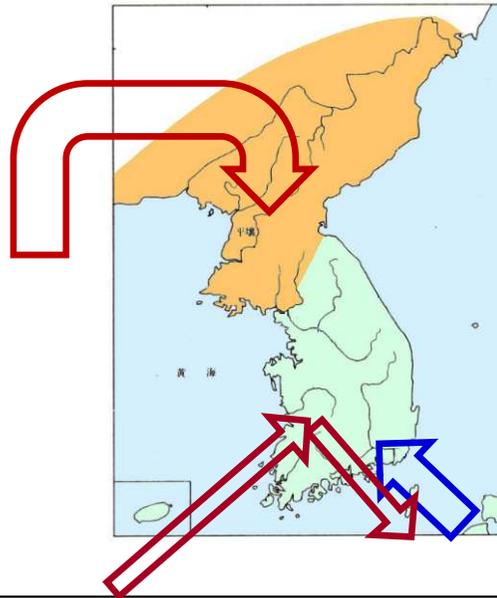
別の表現に置き換えると、

- 西北縄文人が、最初の水田稲作を導入した時期：突帯文式土器(山の寺式・夜臼式・板付I/II式)の時代には、韓国から日本への、人と文物の流入が多かった。
- 倭人(弥生渡来人)が日本に渡来し水田稲作を導入した時期：遠賀川式土器(城ノ越式・須玖I/II式)の時代には、韓国からの人・文物の流れは止まり、逆に、弥生式土器や人・文物は、日本から韓国へと流れた。
 - この弥生渡来人の到来以降の流れは、従来の考古学の常識とは全く異なるもの。

- 水田稲作開始と云う、画期的なことが、朝鮮半島南部:松菊里で起きていた。
 - 日本への稲作の伝播が引き続きを起し、注目する処。
 - 松菊里で特徴的なことをあげると
 - 青銅製剣 : 遼寧式の剣で、古朝鮮で使用されていたもの → 日本へ
 - 無文式土器 : 松菊里型土器
 - 支石墓 : 古朝鮮のテーブル式では無く、長江河口流域から南方の碁盤式支石墓。 → 日本へ
 - 水田稲作 : 古朝鮮では水田稲作は無く、長江河口流域の短粒米 → 日本へ
- 整理すると
 - 北の領域では、満州・遼河領域及び中国の殷の系統の人々が移住して、古朝鮮として成立した。
 - 中国での激しい戦争体験と青銅製武器を持ち、生産基盤は、雑穀農業/牧畜などであった。
 - 従来その地域で生活していた西北縄文人達は、追いやられたものと見られる。
 - 古朝鮮の領域より南側:漢江より南側の半島部分では
 - 西北縄文人が生活し、古朝鮮の文化と人を取り入れ、同時に、海路、長江流域から水田稲作と支石墓(碁盤式)を取り入れていた。
 - この新しい水田稲作の技術と文化は、日本へも伝播した。
 - 紀元前3世紀には、倭人が新しい水田稲作の技術を持って日本に渡来し、西北縄文人に替わり、日本の主体となった。
 - その結果、倭人の新しい技術と文物、更に倭人が、南部海岸地方から朝鮮半島へ侵入してきた。
 - 北の古朝鮮の地域では、中国と中国北部に起源を持つ人々と文化が席捲し、漢江より南の地域では、先住の西北縄文人が、古朝鮮の文化と長江流域の文化を海から取り入れ、新しい文化を作り上げていた。
 - その文化は日本に水田稲作をもたらした。
 - しかし、倭人が新たに日本に渡来した結果、倭人とその文化が、南岸地域から朝鮮半島に入った。
 - 半島の南の地域では、南北の文化と人が混じり合う混沌とした状態が生まれた。

朝鮮半島：韓国教科書に記載の無い部分

4000	1046		1000	300		108 ←BC	AD→	100	200	313	400	500	600	700	
新石器文化	周成立	青銅器文化		鉄器文化普及	古朝鮮滅び					高句麗	百濟発展	新羅基礎	滅亡	滅亡	新羅
										楽浪郡滅亡	新羅基礎		統一		



- 紀元前千年～紀元前108年：古朝鮮の時代に、漢江の南の地域には、西北縄文人が居住し、何んと長江河口域から人と水田稲作と支石墓が導入された。時期は、BC500年頃。(稲作と支石墓は、一時日本へも移入された。)紀元前3世紀には、倭人が日本に渡来し、更に、朝鮮半島へ倭人と弥生土器及び文化が流入した。
- 倭人と弥生文化は、引き続き、朝鮮半島へ流入をつづけたと推定される。
- BC108年以降は、前漢が、楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡の四郡を設置し、朝鮮を支配した。
- その後、AD372年、楽浪郡が、高句麗によって滅ぼされ、百濟・新羅の合わせて三国の時代までの主要な出来事を見て行く。

BC108年～AD400年

- BC108年以降は、前漢が、楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡の四郡を設置し、朝鮮を支配した。
 - しかし、BC82年には真番郡、BC75年に・臨屯郡は廃止され、最後には楽浪郡だけになった。

➤ この時期の中国と日本について、確認する

- 中国
 - BC206年～AD8年 : 前漢
 - AD8年～23年 : 短期間、新が存在し、
 - 25年～220年 : 後漢
 - 魏・呉・蜀の三国時代
 - 265年 - 316年 : 晋 (317年 - 420年) : 東晋
 - 439年 - 589年 : 南北朝時代
 - 581年 - 618年 : 隋
- 日本
 - 57年 : 後漢の光武帝から金印「漢委奴国王」を与える。
 - 107年 : 王帥升等が朝献
 - 238年 : 卑弥呼が魏の明帝に朝献
 - 240年 : 魏の使者が倭国を訪問
 - ? : 神武即位 - 大和朝廷成立

BC108年～AD400年の朝鮮半島

• 高句麗

- BC37年(32年)高句麗建国（扶余の後身と云う）
- 238年には遼東半島の北方の内陸に存在。魏・呉と交流。
- 244年、魏の毋丘儉に都を蹂躪される。(1,000人が斬首)
- その後、敗北から立ち直り、遼東へ進出/朝鮮半島へも進出
- 313年、楽浪/帯方郡を滅亡させた。

• 三韓

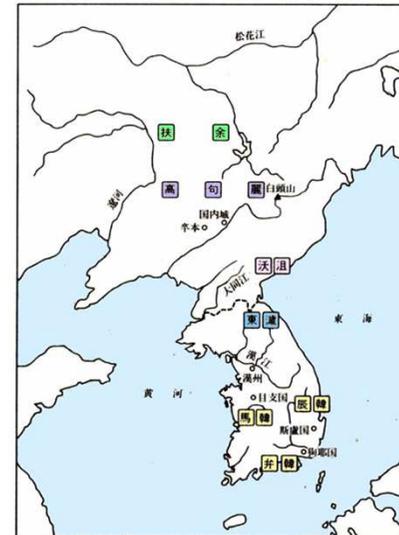
- BC221年 秦始皇帝の統一に際して、燕、齊、趙などの多くの国の民が朝鮮に避難し、そこで定着する。
- BC195年 衛満により箕子朝鮮が滅ぶと、その一族・民が朝鮮半島南部へ避難。
- 三韓が成立。馬韓が盟主。辰王は馬韓人であった。弁韓は、12の小国に分かれていた。

• 百済

- 高句麗の王族が漢江流域に移り、BC18年に建国。
- 314年、高句麗と協力し、帯方郡を滅ぼし、馬韓諸国を統一して、百済を国号とした。
- 371年、高句麗軍を破り、平壤を占領。

• 新羅

- 三韓の辰韓の地を356年に統一したのが、新羅。
- 初期の新羅に関して、三国史記(朝鮮の歴史書)に倭人との関係が記されているので紹介する。



諸国の位置



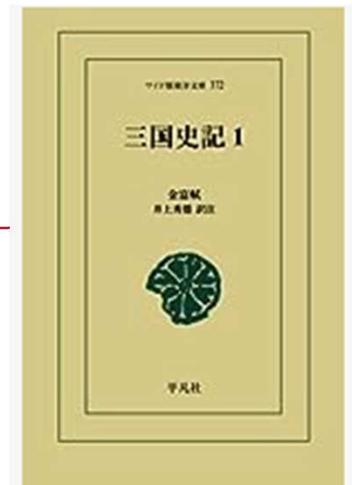
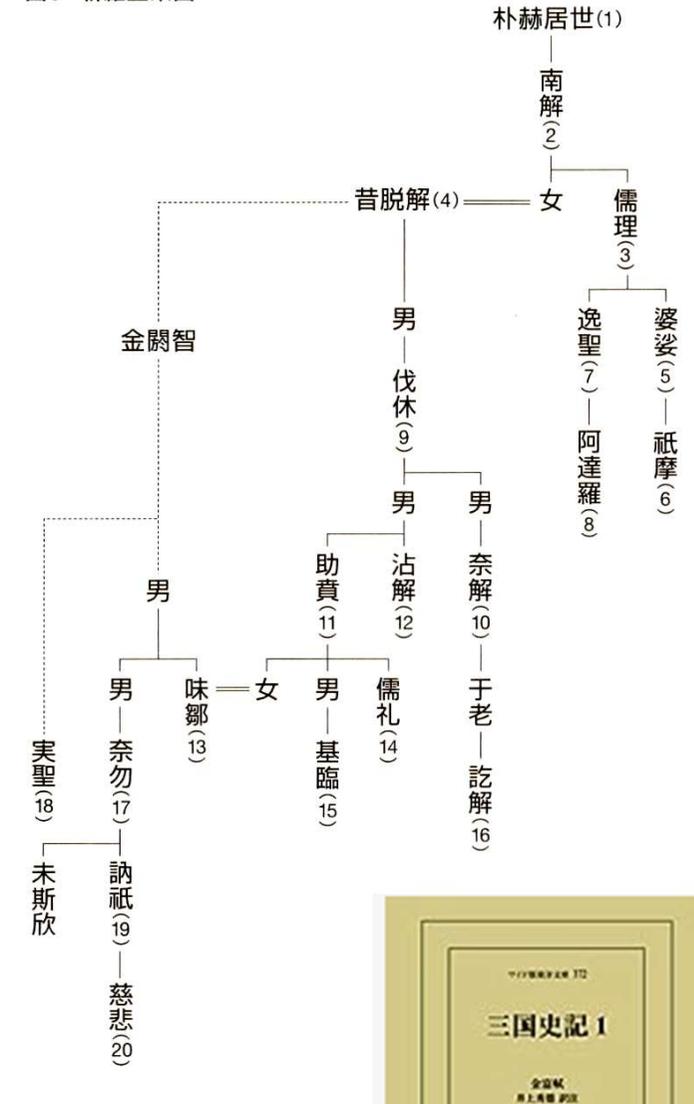
三国の勢力拡張

不思議な新羅の王族＝三国史記より

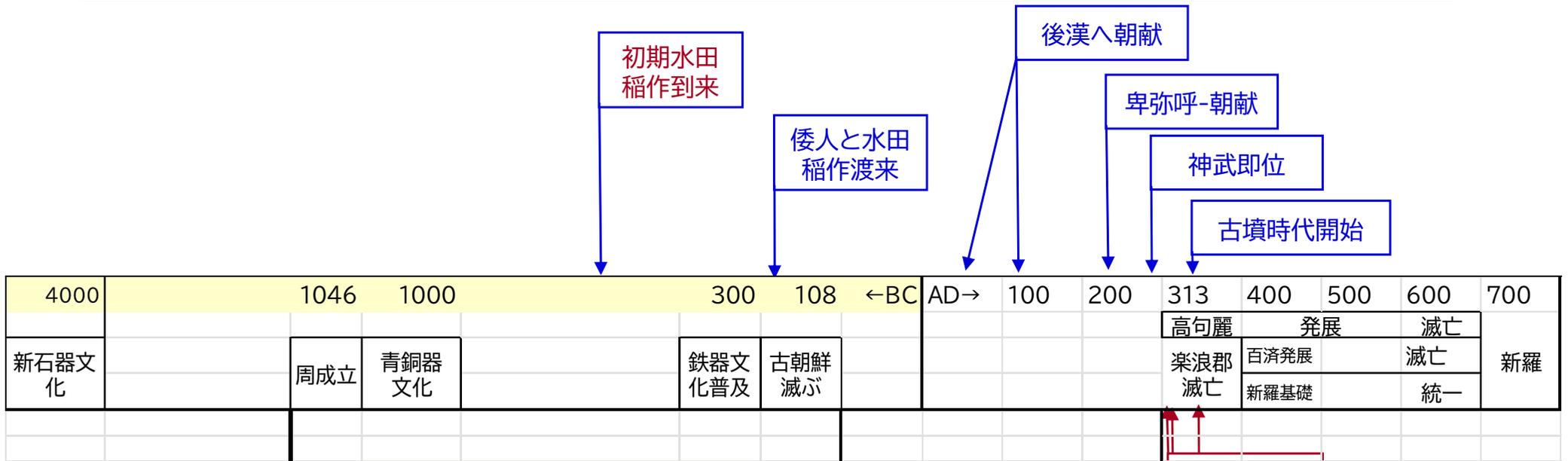
- 朝鮮の正式な歴史書:「三国史記」に新羅の建国と歴代王が記されている。
- 気になる記述をピックアップする。
(新羅の王は、朴・昔・金の三系統の王族から出ることになっていた)
 - 初代 朴 赫居世(BC57～AD4) 瓢公と呼ばれた。
 - 瓢公はその出身の氏族名を明らかにしていない。彼はもともと倭人で、むかし瓢を腰にさげ、海を渡って新羅に来た。それで瓢公と称した。
 - 4代 昔 脱解(AD57～80年)
 - 脱解は、倭国の東北千里にある多婆那国で生まれた。
 - 倭国は、韓国内(弁韓の中か)にあったと推定される。
 - 13代 味鄒(味鄒尼師今)(262～284年)
 - 7代前の金氏始祖とされている金閼智は、昔、林の中で見つかった箱を昔 脱解が開かせた処、男の子が出現した。
- 朝鮮の正式な歴史書が、王の系譜を倭人に関わりがあると記載しているのは、注目に値する。
- この時期には、倭人とその文化が朝鮮半島に進出しており、弁韓の複数の国が倭人のものであったと推定される。そのレベルの高さが尊敬を集めていたのかも知れない。

- 以下、日本と朝鮮の年代を比べて見る！

図5 新羅王系図



朝鮮半島：韓国教科書に記載の無い部分の年表

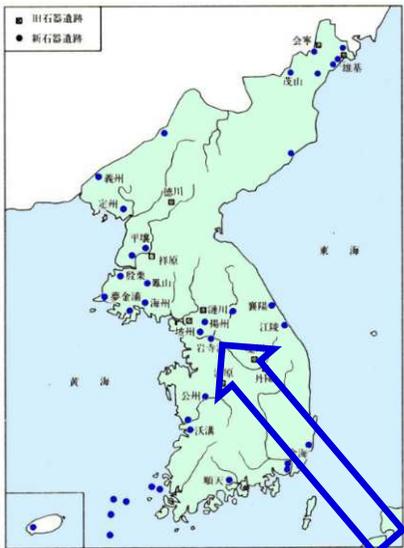


日本から縄文人が進出

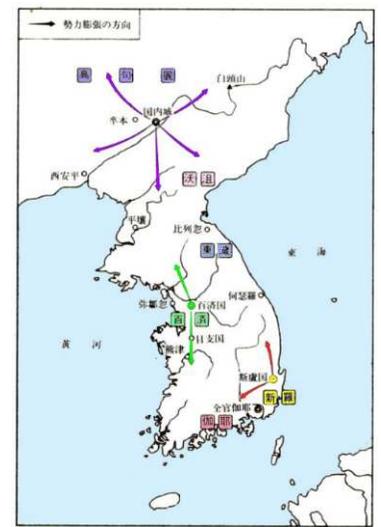
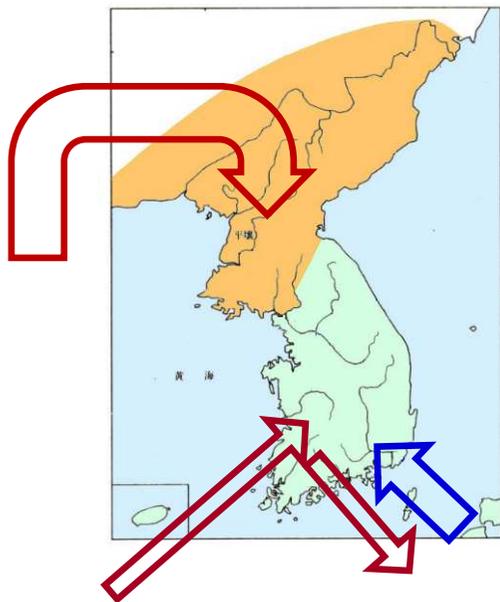
- 中国北部より中国人が
- 中国長江より中国人が
- 水田稲作が日本へ
- 日本から弥生人が

日本から倭人が進出

- 楽浪郡滅亡
- 百濟・開始
- 新羅・開始



先史時代の遺跡



三国の勢力拡張

日本と朝鮮半島の人と物の移動（楽浪郡が消滅した313年頃まで）

時代	誰が	移動方向	証拠
1. 6千年前から	: 西北縄文人	→ 朝鮮半島	土器/石器/ 現代人に残るY-DNA
2. BC5百年頃	: 長江人(春秋呉人)	→ 朝鮮半島 → 日本	米の品種/碁盤型支石墓
3. BC2百年頃から	: 倭人(弥生渡来人)	→ 朝鮮半島	弥生式土器/前方後円墳

- 日本が縄文時代から弥生時代に変化し、大和朝廷が成立する激動の時代が、韓国の歴史教科書に、記載が無かった時代。
- 弥生土器の流れ【日本から朝鮮半島へ】は、今までの考古学の常識を破るもので、下記の問題に関わる問題。
 - 加羅・伽耶の存在
 - 半島南部に存在する多数の前方後円墳

- 又、この時代に関しては、日本の古代史関係者も事実関係を明示しておらず、不明のまま、色々な議論が行われて来た。
 - 日本←→朝鮮半島の人・文物の流れが解明されると、解決のつく問題も多いと思われる。
 - 提起されていたいくつかの問題について、以降、コメントしてみる。
- 1. キビ・ヒエ・アワ耕作の渡来元は？
- 2. 「縄文」から「弥生」への移行に際し、朝鮮半島からの渡来人が果たした役割(稲作、日本語、技術、民族[遺伝子])
- 3. 日本における国家(大和政権)に果たした渡来人の役割
- 4. 天皇一族(天孫族)はどこから来たか、騎馬民族国家説の再検討
- 5. 日本書紀・古事記における朝鮮関連の記述の考察 (スサノオノミコト、アメノヒボコ、ツヌガアラヒト等)
- 6. 出雲族と朝鮮半島との関係
- 7. 蘇我氏のルーツ(蘇我氏は渡来人か?)

1. キビ・ヒエ・アワ耕作の渡来元は？

- 西遼河起源説に示されるように、キビ・ヒエ・アワ等雑穀は北部中国から朝鮮半島を経由して到来したとの説が流布しているが、
 - その時代に、九州の縄文人(西北九州縄文人)が、朝鮮半島に渡来して居住していたこと、及び、その西北九州縄文人が雑穀の農耕・畑作を九州で行っていた事実を無視した説と云える。
 - 特に、九州の黒色磨研土器/黒川式土器の時代に、縄文農耕が行われて来たことが、広く認識されていない。
 - 最近、熊本大学の小畑 弘己 著「昆虫考古学」が発刊され、縄文土器の内部に練り込まれたコクゾウムシなどの存在をCT技術を使い検出。縄文農耕の証拠を多く集め、紹介。
 - イネのプラント・オパールを検出が進み、九州の縄文時代のイネ(焼畑の推定)が多く報告。
- 西北九州縄文人が、九州で行っていた縄文農耕を、朝鮮半島へ持って行ったと考えるのが、適切。

12

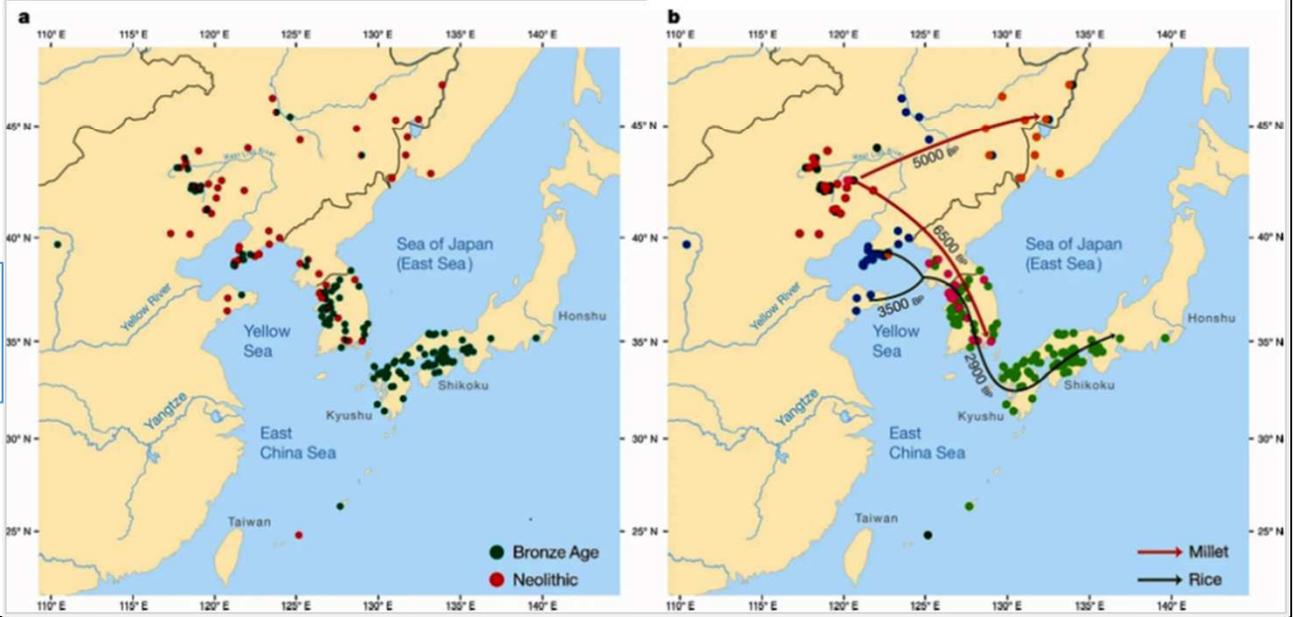
考古学

- 西遼河地域:キビの栽培が9000年前頃までに開始。
- 櫛目紋土器と雑穀(キビなど)農耕(新石器時代)
 - 5500年前頃までに朝鮮半島へ
 - 5000年前頃までにアムール川経由、プリモライ地域へ
- 無紋土器とイネと小麦
 - 4000年前に遼東半島および山東半島地域
 - 3300~2800年前に朝鮮半島(青銅器時代初期)
 - 3000前に日本へ

- 人口移動は一義的に考古学的文化とは繋がらないが、アジア北東部における新石器時代の農耕拡大は、耕作/収穫用の石器と織物の技術などの特徴がある。
- 農耕と人口移動との間のつながりは、朝鮮半島と西日本との間の土器や石器や家屋および埋葬方式(支石墓)の類似性からとくに明らかです。

別府大学賀川光夫教授(1923-2001)は縄文農耕を説き、縄文時代晩期に九州に見られる黒川式土器と中国の黒陶との類似性や黒川式土器に籾痕がみられることから、縄文時代晩期には既に稲作が行われていたと主張した。

「日本語西遼河説について」を紹介する頁。

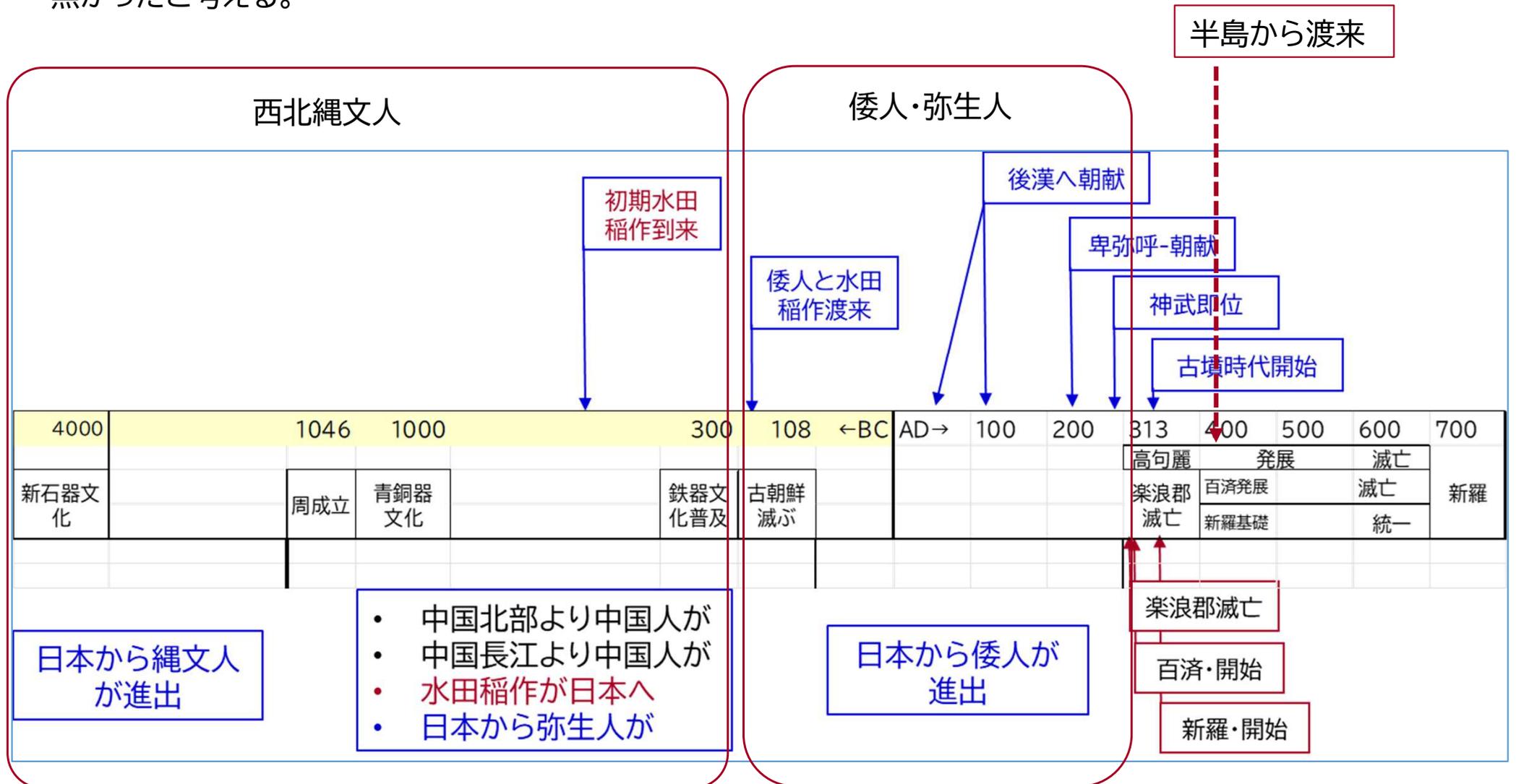


2. 「縄文」から「弥生」への移行に際し、朝鮮半島からの渡来人が果たした役割(稲作、日本語、技術、民族[遺伝子])

- 朝鮮半島からの渡来人が果たした役割(稲作、日本語、技術、民族[遺伝子])
 - 従来は、『人・文物・文明は朝鮮半島から日本へ来た。』との説が有力であったが、
 - 実際には、
 - 縄文時代は、「日本から朝鮮半島へ」人・石器・土器・縄文農耕が移った。
 - 水田稲作が「朝鮮半島から日本へ」広がった。
 - 稲作以外では、支石墓を除き、土器・住居などは、伝播は、限定的であった。
 - 弥生時代には、「日本から朝鮮半島へ」人・土器・その他の文物が移動した。
- 稲作は朝鮮半島から日本に伝播し広がった事実は有った。
 - しかし、倭人が稲作技術を持って渡来すると、その稲作技術・品種は、淘汰され、後に影響を与えなかった。
 - 水田稲作の到来が一回だけの到来と考えられてきたこと、及び、弥生土器が朝鮮半島から日本で伝来したと誤解がある。この二つの理由によって、「人・文物・文明」は朝鮮半島から日本へ来たと云われて来た。
 - 二つの理由が共に誤りであったことから、『人・文物・文明は朝鮮半島から日本へ来た。』との常識は、改める必要がある。
- 日本語、技術、民族[遺伝子]：
 1. 日本語は、倭人が朝鮮半島を経由せずに来たことから、半島の影響は無い。逆に、水田稲作に関しては、弥生時代に日本から朝鮮半島へ伝播した可能性が有り、稲作農耕用語は、日本の単語が朝鮮半島で使用されている。
 2. 技術は、大和朝廷が成立し、古墳時代に入るところまでは、朝鮮半島の技術が日本に移転されることは、少なかったと見る。その時期以降に、朝鮮半島に居た倭人から、馬・乗馬用具などの技術が日本へ伝播したと考える。
 3. 民族[遺伝子]に関しては、古墳時代に入るまでは、朝鮮半島から日本への伝播は、限定的。
 - むしろ、新羅の歴史に見るように、王族には、倭人の遺伝子が入っていたと見るのが妥当。
 - 年表を見れと、流れが「日本から朝鮮半島」で、集団で、日本に来て、主力の部族になるような事態は、余り想像できない。

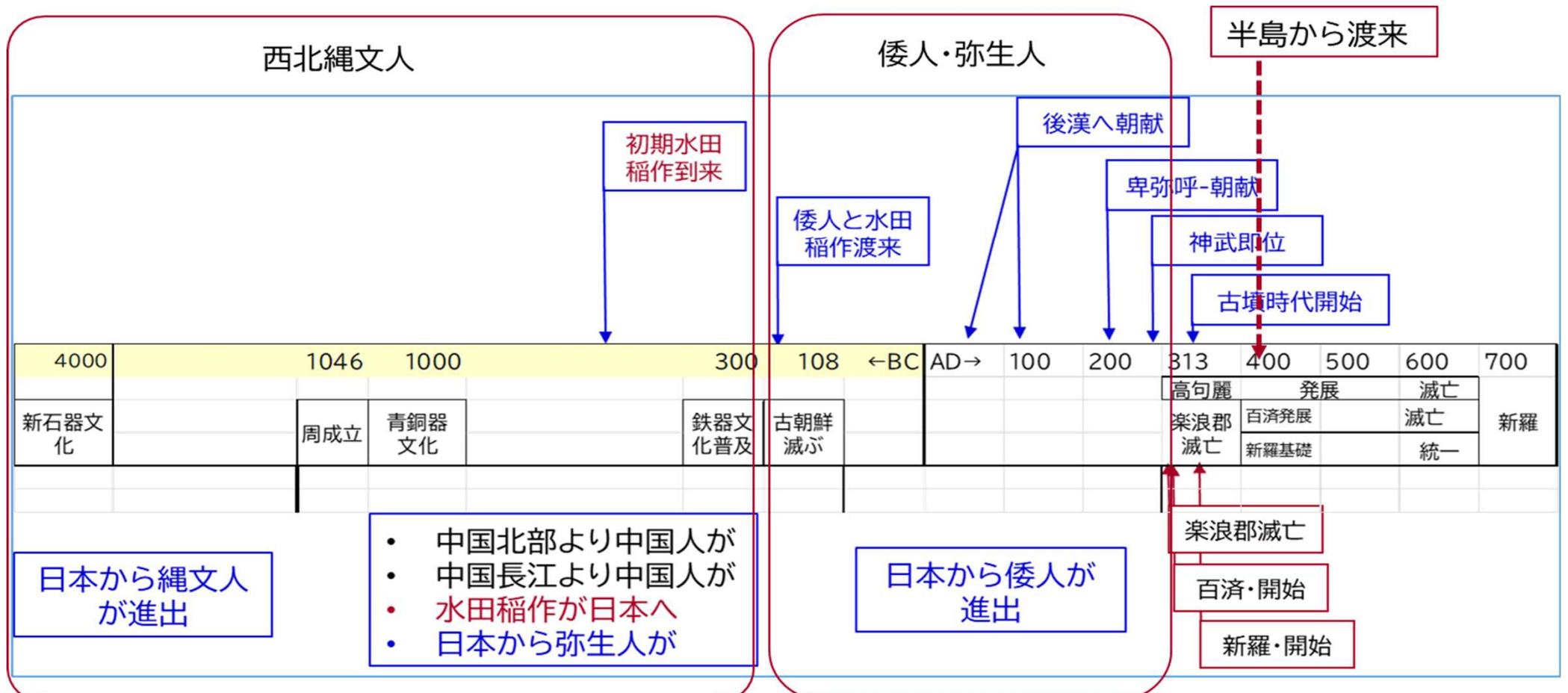
3. 日本における国家(大和政権)に果たした渡来人の役割

- 一般に、日本へ影響があったと言われている、新羅・百済に関しては、大和朝廷の成立時には、朝鮮半島内部で、国として十分な勢力を持っていなかった。
- 高句麗に関しては、古朝鮮の範囲で活動しており、日本からは離れており、日本へ影響は無かったと見る。
- 従って、大和政権の成立時・発展時期(古墳時代)には、朝鮮半島からの渡来人は無く(居ても極わずかで)、影響は無かったと考える。



4. 天皇一族(天孫族)はどこから来たか、騎馬民族国家説の再検討

- 倭人を率いていたのが、天皇一族と思われる。天皇は倭人と同一民族と考える。
- 従来の「人も土器も文化も全て朝鮮半島から日本へ」の説では、騎馬民族が同様に日本に来たとの説も受け入れられたことがあったが、人と弥生式土器の流れが、逆の「日本から朝鮮半島」と判り、天皇が朝鮮半島から来たとする根拠が無くなったと考える。
- 騎馬民族国家説は、大陸の騎馬民族が朝鮮半島を経由して日本へ来たとの説で、下記の年表では、そのようなことが有り得るとは考えられない。
 - 騎馬民族が日本に大挙渡来するには、大型船舶が必要で、騎馬民族が大型船舶を建造する技術が無い。
- 開化・崇神・垂仁・景行・成務・仲哀・応神と記紀に業績の記載がある中に、三国史記の記載もある中で、突然、騎馬民族が、生まれる余地は無い。騎馬民族国家説の再検討の必要は無い。



5. 日本書紀・古事記における朝鮮関連の記述の考察 (スサノオノミコト、アメノヒボコ、ツヌガアラヒト等)

- スサノウノミコトは前述の通り、倭人で、半島との交流が有っても限定的と考える。
- アメノヒボコ：
 - アメノヒボコは、新羅の国の王子として、奈良時代に記された古事記や日本書紀、播磨国風土記に登場する。
 - 新羅の初代から数代の王に倭人が居るとの記述が三国史記に有り、そのように理解すると、後代の王子が倭人の国、日本に来たことはあったと思われる。
 - しかし、それだけの事と思われる。
- 都怒我阿羅斯等(つぬがあらしと)
 - 『ウィキペディア(Wikipedia)』によると
 - 意富加羅国(大加耶/大加羅、おほからのくに、現在の韓国南部)の王子で、地名「敦賀(つるが)」の由来の人物といわれる。
 - 加羅・伽耶の小国の王に倭人が居て、何らかの理由で、海沿いに北陸に移住して、その土地にうまく適合したと、考える。詳細は調べていないので、単なるコメントです。



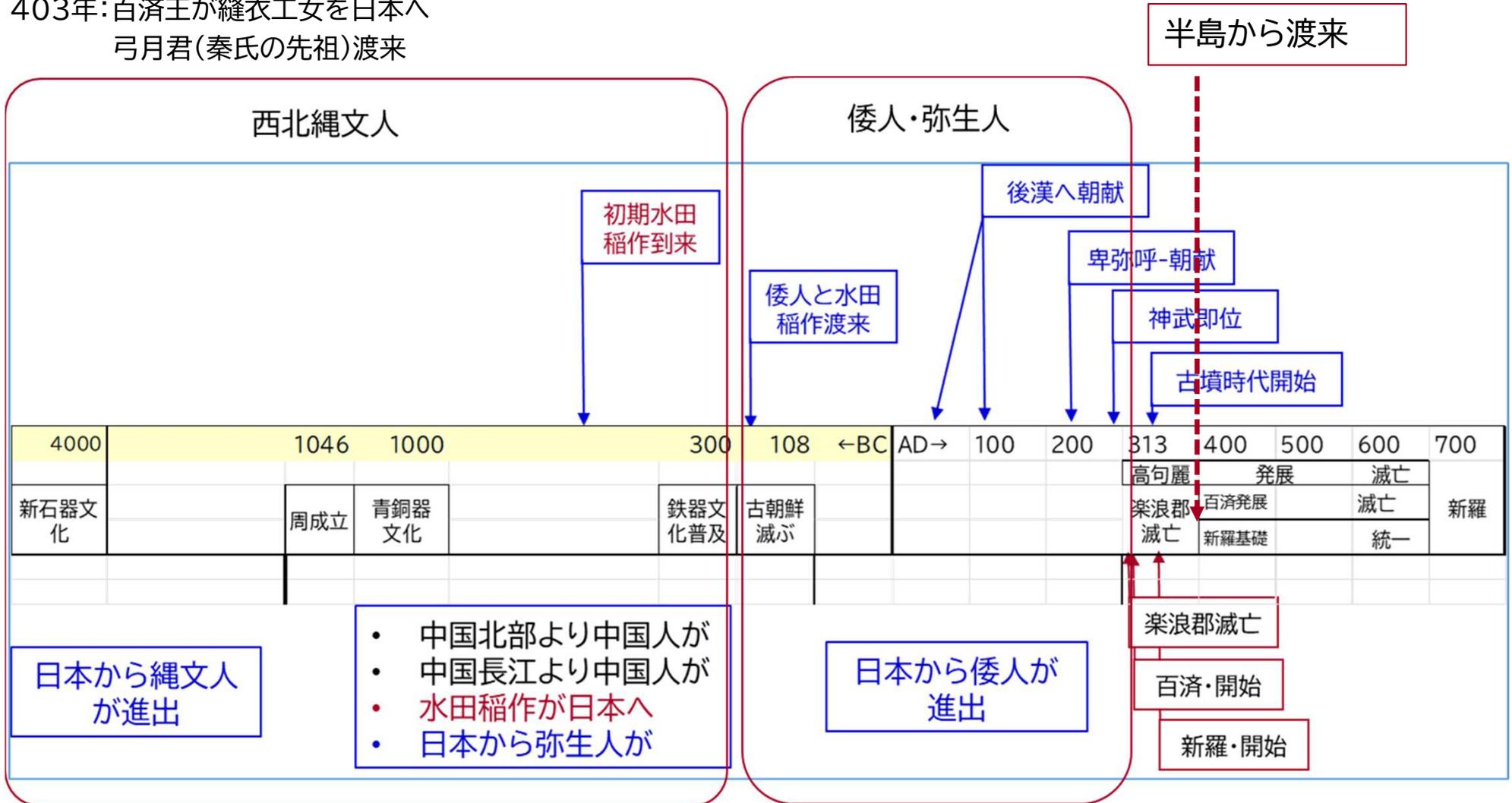
6. 出雲族と朝鮮半島との関係

- 倭人でない朝鮮半島人が、日本で巨大な勢力を持つ出雲族となったとは考えられない。
 - 多数で、武力を持って来ることは、先ほど来のコメント通り、有り得ない。
 - 又、九州の倭人の製造する青銅武器・銅鐸を、その九州の倭人から購入できる理由も見つからない。
- 出雲族は、倭人の一部であったと考える。
 - 古事記の記述から、倭人では無かったとは、考えられない。
- 出雲勢力が朝鮮半島と往来し、交易したことが、考えられるが、その可能性は限定的。
 - 石丸あゆみ氏の著作では、壱岐の島と靉島の遺跡の多くを占める土器が、糸島半島由来のものであったと記している。
 - 糸島半島は、天孫族の根拠地で、三雲南小路・井原鎗遺跡・平原遺跡など三種の神器を出す遺跡は、出雲族では無い。
 - 従って、壱岐と靉島のルートでは、出雲勢力が大きな力を持っていたとは、考えられない。
 - 出雲族の人名に朝鮮半島に関わるものが有るため、朝鮮半島との交易は有ったとは、考えるが、主要ルートである壱岐—靉島が使えないとすると、交易は限定的と云える。

応神天皇の西暦年代

- 362年: 仲哀天皇が崩御
- 363年: 新羅へ出兵
- 390年: 応神天皇即位
- 392年: 百済王辰斯王→阿花王
- 396年: 高麗人、百済人、任那人、新羅人らが来朝。
- 397年: 百済人が来朝
- 403年: 百済王が縫衣工女を日本へ
弓月君(秦氏の先祖)渡来

古事記・日本書紀・三国史記を照らし合わせると、左記の年代設定が適切と、丸地には、考えられる。

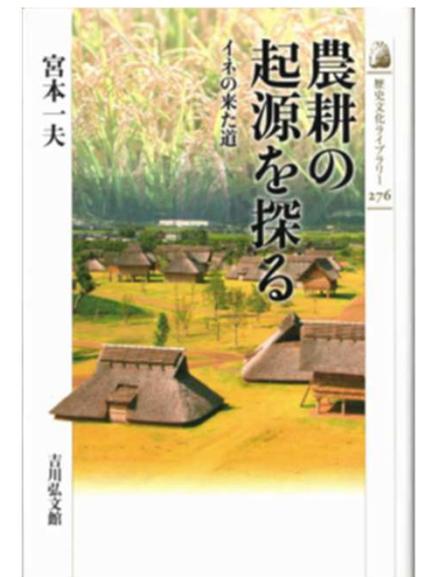
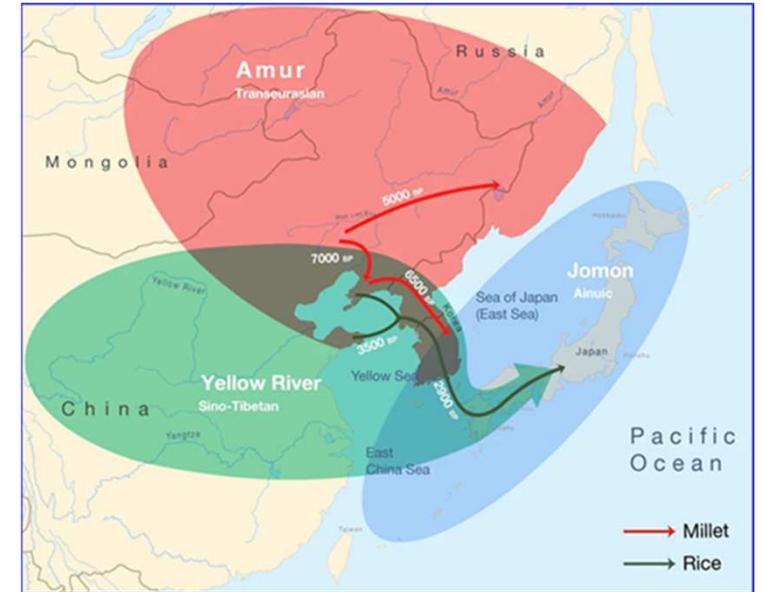


8. 蘇我氏のルーツ(蘇我氏は渡来人か?)

- 古事記の記述によれば、蘇我氏は、神功皇后の三韓征伐などで活躍した武内宿禰を祖としている。
 - 武内宿禰は、8代天皇 孝元天皇の孫。仲哀天皇とは、同日に生まれた。
 - 神功皇后の子の応神天皇を支えるために大きな働きをしたと理解。
 - 神功皇后の大和帰還に際して、仲哀天皇の嫡男、次男である香坂皇子、忍熊皇子との滋賀付近での戦いで勝利したこともあり、香坂皇子、忍熊皇子を支えて一族を敵対視して抗争したと、想像する。
 - 朝鮮半島との関係は、神功皇后と共に、朝鮮半島へ行き戦った筈。単に、行って戦っただけと考える。何故か、謎の蘇我氏と云われる理由が判らない。

次回：9月9日には、西遼河起源説＋α

- 次回は、「西遼河起源説」と「それに対する反論」について紹介いたします。
 - 「西遼河起源説」は、言語的・考古学的・遺伝的根拠をもとに西遼河とするトランスユーラシア語が日本語の起源であるとする説。
 - ドイツなどの国際チームが、ネイチャー誌に発表。
 - 著者41名には、日本の多くの著名学者が名を連ねた。
 - 2021年より、毎日新聞などで大きく取り上げられた。
 - 2022年に、ドイツ・フランスなどの学者が、論文の取り下げを要請する声明を発表した。
日本語・琉球祖語の学者(フランス人)が来日し、撤回要請とその理由などを説明した。
- 更に朝鮮半島と日本に関する2冊の本について、論評します。
 - 5月の発表で、清水さんが根拠として示された西谷正氏の「古代日本と朝鮮半島の交流史」と宮本一夫氏「農耕の起源を探る - イネの来た道」について、重大な疑問がある。
 - この両著のような思考が、西遼河起源説のベースとなったと推測する。



2023.5.13

朝鮮古代史と日本

清水徹朗

1

I. はじめに – 深い朝鮮半島と日本の関係 –

- 「朝鮮」は日本の隣国であり、古代より非常に深い関係にある
・・・民族(遺伝子)、言語、稲作、神社、仏教、陶磁器、青銅器・鉄器
- 日本の芸能界、スポーツ界に朝鮮出身者(及びその子孫)が多い
- 在日朝鮮人(特別永住者)が29万人いる。
- 韓国から多くの訪日観光客(ピーク時の2018年は754万人)。
- 韓国を訪問する日本人も多い(2018年で295万人)。
- 現在でも両国の深い関係は変わっていないが、「歴史問題」等から日本と韓国・北朝鮮は必ずしも良好な関係にあるとは言えない
- しかし、多くの日本人は朝鮮の歴史をよく知らない
→ 朝鮮半島の歴史、日本との関係を正しく深く理解する必要がある

2

II. 朝鮮古代史概説

[旧石器・新石器時代]

- 朝鮮半島には40～50年前の原人が残した遺跡が存在。
- 日本に人類が渡来したのは一般には4万年前とされている。
ただし、近年、10万年前(長崎県平戸市)、11～12万年前(島根県出雲市)の遺跡がみつがっている。
- 1万3千年ほど前、ほぼ同時期に朝鮮半島(櫛目文土器)と日本(縄文式土器)で土器が出現(新石器時代)。
- 日本でも西北九州を中心に櫛目文土器が出土し、朝鮮半島でも縄文土器が出土しており、縄文時代から相互に交流があった。また、黒曜石、狩猟道具、装身具などでも交流の痕跡がある。



櫛目文土器

縄文土器



3

[農耕の開始と集落・墓制]

- 朝鮮半島ではBC2000年頃から雑穀の栽培が広がる。
- 日本でも同時期に雑穀栽培が行われたが、それほど広がらなかった。
- 朝鮮半島ではBC1000年頃から稲作が拡大(BC20世紀に稲作が開始されたとの主張もある)。
- 農耕の普及とともに定住集落が形成され、朝鮮では支石墓が発展。日本でも九州に支石墓が伝来。
- 朝鮮ではBC8～9世紀に青銅器が製作され、その後、鉄器も使われるようになる。日本の青銅器、鉄器は朝鮮から伝来。



4

II. 朝鮮古代史概説

疑問あり

[旧石器・新石器時代]

- 朝鮮半島には40～50年前の原人が残した遺跡が存在。
- 日本に人類が渡来したのは一般には4万年前とされている。
ただし、近年、10万年前(長崎県平戸市)、11～12万年前(島根県出雲市)の遺跡がみつまっている。
- 1万3千年ほど前、ほぼ同時期に朝鮮半島(櫛目文土器)と日本(縄文式土器)で土器が出現(新石器時代)。
- 日本でも西北九州を中心に櫛目文土器が出土し、朝鮮半島でも縄文土器が出土しており、縄文時代から相互に交流があった。また、黒曜石、狩猟道具、装身具などでも交流の痕跡がある。



櫛目文土器



縄文土器



[農耕の開始と集落・墓制]

疑問あり

- 朝鮮半島ではBC2000年頃から雑穀の栽培が広がる。
- 日本でも同時期に雑穀栽培が行われたが、それほど広がらなかった。
- 朝鮮半島ではBC1000年頃から稲作が拡大(BC20世紀に稲作が開始されたとの主張もある)。
- 農耕の普及とともに定住集落が形成され、朝鮮では支石墓が発展。日本でも九州に支石墓が伝来。
- 朝鮮ではBC8～9世紀に青銅器が製作され、その後、鉄器も使われるようになる。日本の青銅器、鉄器は朝鮮から伝来。



